

Think globally, Act locally

2023

8.28, 9.2, 9.3-9.8,
10.28

Thailand

文部科学省委託 令和5年度 新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業

タイ政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書



ACCUC

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

文部科学省委託
令和5年度新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業

タイ政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書

バンコク都・ナコーンラーチャシーマー県・サラブリー県
オリエンテーション:2023年8月28日(月),9月2日(土)
タイ滞在:9月3日(日)-9月8日(金)
リフレクション:10月28日(土)

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO) は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU はアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドの間で行われ、これまでに 4,500 人近くの海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1,200 人を超える教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日タイ・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々との相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

2015 年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、国際連合大学の委託を受けて、文部科学省、タイ教育省の協力のもと、新たに「タイ教職員招へいプログラム」が始まり、タイ教職員を本邦に招へいすることになりました。2018 年度からは、新たにタイ政府による日本教職員の招へいプログラムが開始され、日本の教職員も派遣されることになりました。コロナ禍はオンラインで交流を続け、今年度は対面交流が再開されました。2023 年度はオンラインと対面交流が組み合わさったプログラムとなり、全国の応募者から選抜された日本教職員 6 名および文部科学省職員、ACCU 職員各 1 名が参加しました。

ポストコロナ期の初めは、首都バンコク、ナコーンラーチャシーマー県やサラブリー県を訪問しました。タイ教育省や学校・教育文化施設、ユネスコジオパーク等の訪問を通して、タイにおける教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、および両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、タイの教職員、児童生徒と交流しました。このプログラムを通じて、参加者の日本教職員はそれぞれの教育現場で今回の経験を活かし、成果を児童生徒、同僚の教職員、地域の方々に伝えています。日本とタイの相互理解や国際交流の立役者として、彼らのこれからの活躍に期待が寄せられています。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、タイ教育省、文部科学省、タイや日本の各学校をはじめとしたすべての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2024 年 3 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

目次

1. プログラム概要	3
2. 実施内容・訪問記録	11
3. 成果と今後への活用	39
付録 プログラム写真	49
過去のプログラム実績	58

1. プログラム概要

プログラム概要

1. 背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、ユネスコの基本理念に基づき、相互理解の促進と持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。その活動の一つとして、アジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的に、未来を担う子どもたちを育む「教職員」を対象とした国際交流事業を日本政府の協力のもと 2001 年より開始し、これまでに日本と韓国・中国・タイ・インドとの間で、4 千人を超える海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人以上の教職員を海外に派遣してきました。その結果、教職員の学びが数多くの生徒・教職員・地域住民に還元されるほか、当事業をきっかけに多くの学校間の国際交流が生まれ、各国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

初等中等教育にかかる日タイ間の交流事業は、2015 年度にタイ教職員を日本に招へいするプログラムが開始されて以来、毎年 15 名のタイ教職員が日本を訪問し、教職員や児童・生徒との交流を深めてきました。そして、これらの実績が評価され、2017 年に行われた日タイの教育大臣による会談においてタイ政府による日本教職員の受入れが提案されたことを契機に、2018 年に「第 1 回タイ政府日本教職員招へいプログラム」が実施され、5 名の日本教職員がタイを訪問することにより、日本側・タイ側の念願であった双方向での交流事業が開始されました。2019 年度には 7 名の日本教職員が派遣され、コロナ禍ではオンラインを通して交流を続けてまいりました。

2023 年度はコロナ禍を経て対面交流が復活し、タイ教育省協力のもと、文部科学省委託「初等中等教職員国際交流事業」の一環として、6 名程度の教職員が下記の要項に基づきタイを訪問します。

2. 目的

- ・日本とタイ教職員の交流促進のため、参加者がそれぞれの考えや教育実践を共有する機会を提供すること
- ・タイの教育事情に関する知識を得てタイに対する理解を深めること
- ・学校間の連携のため、日タイ教職員間のネットワークを構築すること
- ・日本とタイ教職員同士のつながりを強化すること

3. 活動内容

- (1) 学校等の教育施設の訪問
- (2) タイの教職員および児童生徒との教育現場での交流・意見交換
- (3) 教育・文化施設の視察

4. 日程

オリエンテーション①: 2023 年 8 月 28 日 (月) (オンライン)

オリエンテーション②: 2023 年 9 月 2 日 (土) (出発前日)

タイ滞在期間: 2023 年 9 月 3 日 (日) - 9 月 8 日 (金) (6 日間) ※日本到着は 9 月 9 日 (土)

フォローアップ MTG: 2023 年 10 月 28 日 (土) (オンライン)

日付		場所	活動
8 月 28 日 (月)	午後	オンライン	オリエンテーション①
9 月 2 日 (土)	午後	東京の空港近辺	オリエンテーション②
9 月 3 日 (日)	タイ滞在 1 日目	バンコク	東京 (成田) 出発バンコク到着
9 月 4 日 (月)	タイ滞在 2 日目	バンコク	タイ教育省表敬訪問、学校訪問

9月5日(火)	タイ滞在3日目	ナコーンラーチャシーマー県	学校訪問
9月6日(水)	タイ滞在4日目	ナコーンラーチャシーマー県	コラートジオパーク(「ユネスコ世界ジオパーク」)訪問 学校訪問、教育文化施設訪問
9月7日(木)	タイ滞在5日目	サラブリー県	学校訪問
9月8日(金)	タイ滞在6日目	バンコク	プログラム評価会 教育文化施設訪問 バンコク出発(夜)
9月9日(土)	機内泊	日本	日本(成田)着
10月28日(土)	午後	オンライン	フォローアップミーティング

注:訪問先、活動内容については変更の可能性あり。詳細が決定次第、参加者に共有する。

5.参加者

- (1) 公募により選抜された、日タイ間の教職員交流に高い関心を持つ自治体または学校の教職員6名
- (2) 文部科学省、ACCUの職員各1名

6.参加資格

- (1) 日本国籍を有すること。
- (2) 過去に本プログラムに参加したことがないこと(2021年度、2022年度を除く)。
- (3) 所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。
- (4) 健康で、オンラインを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) プログラム期間中の意見交換や文化交流活動に積極的に参加できること。
- (6) プログラム期間中の学びを帰国後に児童生徒や学校、地域に伝える役割を担えること。
- (7) 将来にわたりタイと日本の教育交流の推進に寄与できること。
- (8) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的にプログラムに参加できること。
- (9) 習慣や文化の異なる国との交流であることを理解し、突然の変更などにも柔軟に対応できること。
- (10) EメールやLINEを用いて円滑に連絡ができ、またMicrosoft Word/Excelを用いて所定フォーマットに必要情報を入力し提出できること。
- (11) 日常会話レベルの英語能力を有すること。
- (12) オンラインで必要なPCや通信環境を準備し、活用できること。

7.評価と報告

参加者は帰国後、所定の様式によりACCUに報告書を提出する。報告書は、ACCU編集の実施報告書に掲載する。

- (1) 第1回参加者報告書提出期限:2023年10月7日(土)正午
※主にプログラム中の成果について報告
- (2) 第2回参加者報告書提出期限:2024年1月31日(水)正午
※主に帰国後の取組やその成果について報告

8.渡航費等諸経費

- (1) タイ政府が下記について負担する。
 - 往復航空運賃(日本(東京)とタイ(バンコク)の国際空港間のエコノミークラス航空券)

- タイ国内の移動に要する交通費
- タイ滞在中の宿泊、食事
- タイ国内のプログラム運営に必要な経費

(2) ACCU が下記について負担する。

- 日本国内交通費：自宅からオリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の羽田/成田空港からの自宅までの交通費の定額（ACCU の規定に準ずる）
- オリエンテーション②当日（出発前日：9 月 2 日）の宿泊費
注 1：オリエンテーション②当日、開始時刻までに到着可能な交通手段がない場合に限り、前日（9 月 1 日）の宿泊費を支給する。
注 2：帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、帰国当日（9 月 9 日）の宿泊費を支給する。
注 3：本プログラムは所属機関を代表し、基本的に公務扱いでの参加となるため、日当は各所属先にて負担する。期間を通して ACCU から日当は支給されない。

(3) 各参加者の負担

- 海外旅行保険料：プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。また COVID19 など感染症に関してカバーされるか確認すること。
- 上記（1）、（2）以外の諸経費

(4) 旅券と査証について

- 旅券（パスポート）：入国時に 6 ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証（ビザ）：ビザの取得は不要

9. 現地での使用言語

タイでのプログラムは、おおむねタイ語⇄日本語の通訳が入る予定。

10. 情報管理・その他

以下に関して、あらかじめ了承した上で参加申請すること。

- オリエンテーションやプログラム期間中に撮影された写真等は、文部科学省、ACCU、タイ教育省の作成する資料やホームページなどの紙・電子媒体で、随時使用、掲示・掲載される。
- 参加者から提出される申請書類にある情報は、プログラム準備・運営のため、必要に応じて、文部科学省、在タイ日本国大使館、タイ教育省、在京タイ大使館に共有される。
※情報は厳重に取り扱われ、本プログラム運営以外の目的で使用されることはありません。
本事業への参加後に、アンケート調査への協力依頼がなされる。

プログラム日程

日程	時間	内容	形式・宿泊
8/28 (月)	15:00-18:00	講義 オリエンテーション 旅行説明	オンライン
9/2 (土)	15:30-18:00	個人&グループワーク ACCUより連絡 参加者同士の打ち合わせ・相談 全員で出し物練習	ホテルマイステイズ プレミア成田
		夕食交流会	
9/3 (日)	12:00	TG 643 で成田国際空港からスワンナプーム国際 空港へ出発	ヌーボ シティ ホテル
	16:30	バンコクのスワンナプーム国際空港に到着	
	17:00	ホテルに移動	
	18:00	ホテルに到着	
	18:15	プログラムのオリエンテーション	
	19:00	ホテルでの夕食	
9/4 (月)	08:00	学校に向けて出発	ヌーボ シティ ホテル
	09:00	学校に到着	
	09:00-12:00	教育交流活動と学校訪問	
	12:00-13:00	昼食	
	13:00	タイ教育省へ出発	
	14:00	タイ教育省に到着	
	14:10-14:30	タイ教育省表敬訪問	
	14:30-16:30	タイ教育の紹介	
	17:00	ホテルに戻る	
	18:30	ホテルでの夕食	
9/5 (火)	07:30	ナコーンラーチャシーマー県へ向けて出発	ザ リッチ ホテル
	12:00	昼食	
	13:00	学校に向けて出発	
	13:30-16:30	教育交流活動と学校訪問	
	18:00	夕食	
9/6 (水)	08:00	コラートジオパークオフィスへ向けて出発	コラート化石博物館
	08:30-09:00	コラートユネスコ世界ジオパークの概要説明	
	09:00-10:30	コラート化石博物館	
	10:30-11:30	コラート化石博物館(研究セクション)	

	11:30-12:00	ジオパークネットワーク学校へ出発	
	12:00-13:00	昼食	
	13:00-14:00	ソンノン学校	ソンノン学校
	14:15-14:45	ドヴァラヴァティ砂岩涅槃仏	タンマチャック・セマラー ム寺
	14:45-15:30	ジオサイト、カオチャンガム洞窟へ出発	
	15:30-16:30	ジオサイト	カオチャンガム洞窟
	16:30-17:00	ヤイティアン・クエスタへ向けて出発	
	17:00-18:00	ヤイティアン・クエスタサイト	ヤイティアン・クエスタ
	18:30	夕食	
	19:00	ホテルに戻る	
9/7 (木)	08:00	サラブリー県へ向けて出発	
	10:00	サラブリー県の学校に到着	ゲンコーイ学校
	10:00-12:00	教育交流活動と学校訪問	
	12:00	昼食	
	14:00-15:30	ゲンコーイ学校の生徒たちによる文化授業	
	16:00	バンコクへ向けて出発	
	19:00	ホテルに到着	ヌーボ シティホテル
	19:30	夕食	
9/8 (金)	08:00	タイ教育省へ向けて出発	ホテルからチェックアウト
	09:00-10:30	プログラム評価会議および閉会式	タイ教育省
	11:00-12:00	バンコクの文化史跡訪問	王宮とワット・プラ・ケオ (エメラルド寺院)
	12:00	昼食	
	13:00	バンコクの文化史跡訪問	ワット・アルン (暁の寺)
	18:00	スワンナプーム国際空港へ向けて出発	
	23:50	スワンナプーム国際空港から TG642 で成田国際 空港へ出発	
9/9 (土)	08:10	成田国際空港に到着	
10/28 (土)		レフレクション・振り返りミーティング	オンライン

【タイの教育事情に関する講義(講師)】

広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 牧貴愛 先生

参加者リスト

No.	氏名	所属	職名	担当係
01	竹島 潤	岡山市立操南中学校	教務主任／ 総合・SDGs 主任	団長
02	後藤 幸洋	北海道置戸高等学校	教頭	文化交流
03	浅見 友記夫	大阪市立加美中学校	主務教諭	写真
04	中野 彩華	八千代市立大和田南小学校	教諭	写真
05	根岸 彩夏	群馬県立大間々高等学校	教育研究部主任	交流授業
06	川田 雅俊	守谷市立守谷小学校	英語科主任	情報共有
07	生田目 裕美	文部科学省大臣官房国際課	海外協力政策係長	
08	伊藤 妙恵	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部	プログラム・ スペシャリスト／ 主任	

プログラム関係機関

<日本側機関>

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan (MEXT)

<タイ側機関>

タイ教育省/Ministry of Education, Thailand

<訪問校・訪問機関>

テプシリ学校/
Debsirin School (バンコク)

ナコーンラーチャーシーマー・ラチャパット大学デモンストレーション学校/
The Demonstration School of Nakhon Ratchasima Rajabhat University (ナコーンラーチャーシーマー)

コラート化石博物館、コラートユネスコ世界ジオパーク/
Khorat Fossil Museum, Khorat UNESCO Global Geopark (ナコーンラーチャーシーマー)

ソンノン学校/
Sung Noen School (ナコーンラーチャーシーマー)

ゲンコーイ学校/
Kaeng Khoi School (サラブリー)

<企画・実施・運営>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

2. 実施内容・訪問記録

オリエンテーション

コロナ禍を経て、海外渡航に対する規制が緩和されたことに伴い、4年ぶりに現地への派遣プログラムが再開された。タイ滞在前に、オリエンテーションが2回行われ、事前にタイの教育事情について学ぶとともに、プログラムの目的やねらいを参加者で確認し合った。また、参加者同士が互いを知り合い、みんなで充実したプログラムをつくっていくために、テーマについて考えたり、グループで語り合ったりした。それぞれが、これまでの経験や力、強みを発揮できるよう、意思疎通を図った。

オリエンテーション①

[オンライン] 2023年8月28日(月)



今年度のプログラムの最初の取り組みとして、オンラインによるオリエンテーションを行い、今回のプログラムに参加する先生方との顔合わせと、広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 牧 貴愛氏によるタイに関する基本的な情報や歴史についての講義があった。初めはこのオンラインミーティングへの参加もドキドキと不安でいっぱいであったが、講義を通してタイという国の在り方や、各学校の特色、教育事情、マナー、基本的な生活習慣などを知ることとなった。少しずつ緊張も和らぎ、先生への質問時間も設けられ、

各々が持っていた疑問に対する質問にも丁寧な回答を得られたことから、タイへの派遣が心配から期待に変わることとなった。

その講義の後には、参加者の一人ひとりから順番に自己紹介がなされるとともに、今回の派遣事業に対する意気込みが話されたことで、それぞれの先生方の熱意を垣間見ることができた。自己紹介の後には、ACCUより共通のテーマをもとに話し合いの機会や発言の機会が設けられた。

テーマは、タイについて思い浮かぶことを用紙に思う限り書くこと。その中で特に印象に残ったことを一枚の用紙に大きく記し、皆の前で発表するというものであった。それぞれの先生が思い思いに発表していたが、その決められた時間であっても、真剣に考え、6人の参加者の先生の思いの詰まった発表であった。

その発表時間も終わりが近づき、ACCUから次回の成田での活動について、集合時間などの説明を受けた。不安もあながらの参加であった今回のオンラインミーティングが結果的に、この後の成田での顔合わせ、離陸の日を一層楽しみにさせたのであった。

◆学びや所感

牧先生の講義の中で特に印象的であったのは「竹の外交」という言葉である。東南アジアの中でフランス、イギリスの緩衝国という位置取りで、柔軟に外交を行い、国としての地位を確立していったという、東南アジアの中でも類まれな外交の上手な国であるという話を聞き、タイという国に俄然興味が湧いたのが率直な感想である。また、欧米や日本の教育政策や制度なども多く取り入れ、さらに独自の文化として発展させていく力も兼ね備えている柔軟性を持ち合わせていることも講義の中から学ぶことができた。

また仏教徒が国の大多数を占めるとともに、教師と生徒の立場が垂直的關係で、明確に分けられているという点においても現在の日本とは違う点であると認識することができた。益々生徒に会うのが楽しみになった。

今回のオリエンテーションプログラムの中で最も印

象に残っているのは、参加者の一人が、タイの印象について発表した内容であった。その内容とは「急成長」という言葉である。10年前のタイと現在の物価は大きく変わっており、日本とかなり近づいていたり、外資系企業の進出、それに伴う高層ビルの建築などがあることから、急成長という言葉を選択したということであったが、これについては、牧先生も大いに納得し、凄まじい勢いで東南アジアの中で目まぐるしく成長している国と語っていた。また10年後には更なる発展の見込める国であるという認識であった。

私もタイに降り立った際には、そういった社会情勢、経済事情にも目を通しながら滞在しようとする期待を膨らませたオンラインミーティングであった。

(浅見 友記夫)

オリエンテーション②

[成田市] 2023年9月2日(土)



【出発前オリエンテーション】

1. 訪問先・日程の確認

会場にて集合し、それぞれの挨拶を済ませた後、下記の件について ACCU 側より確認があった。

- ・タイでの訪問先や滞在するホテルの場所
- ・大まかな日程
- ・翌日の集合場所や集合時間
- ・成田国際空港での手続き

2. 個人及びグループワーク

二つのテーマについて、まず個人で考えたことを付箋に書き、次に二つのグループに分かれKJ法を用いて話し合いを行った。

<テーマ>

- ①タイ派遣のプログラムを通じて達成したいこと
- ②文化的多様性や異文化を理解し、受け入れるにあたって最も重要なことは何か

両グループで共通していた内容としては、現地の教育制度を学び、教員や生徒と積極的に交流を行っていくこと、派遣教員同士のコミュニケーションを取り、今後の教育活動に活かせるつながりを構築することである。いずれも帰国後に、交流授業等を展開し、持続可能な関係作りに努めたいという思いが込められていた。

3. 授業準備

オリエンテーション後半は、9月7日の日本文化授業に向けて、ペアの授業者とともに授業準備を行った。その後、各授業者より展開内容について簡単な紹介をした。

- ・スポーツ(柔道) → 竹島・浅見
柔道について、基本的な型
- ・ディスカッション → 根岸・川田
日本についての印象 ※内容は検討中
- ・文化(書道・折り紙) → 後藤・中野
兜の折り紙と漢字一文字を書いたカード

授業の最後に披露するダンス(恋するフォーチュンクッキー・AKB48)の練習日程と音源の確認をした。

◆学びや所感

対面での出会い日であったものの、終始非常に和やかな雰囲気でのオリエンテーションであったように感じる。さすがと言わんばかりの先生方のコミュニケーション能力の高さと、タイ派遣に向けての学びに対する意欲の高さが、話しやすい環境でスタートできた要因であったのではないかと思う。

それが象徴的であったのは、やはりグループワークの場である。個人が描いた付箋を集めてみると、共通する内容が多く書かれていたため、ブレインストーミングをしながら話し合うことは、タイ派遣に向けてのさら

なる期待や意欲を高める刺激となった。

私が参加したグループでは、話し合う中で「付箋に書いたすべてのキーワードは、帰国後の教育活動に生かすために持ち帰りたいものである」と結論づいた。タイを知ることは、すなわち日本を知ることもつながる。異文化理解とは、相手との相違を知る中で、自国のよさや課題について考えるきっかけになる。タイ以外の国の学校を視察したり、現地で授業をしたりした経験がある私は、既に気付いていたことであった。しかし、コロナ禍が長く離れていた海外と失われた異文化で生きる感覚、長く日本の学校制度の中で働くことで、その環境や考え方に染まり、忘れかけていた感覚を、先生方と話し合う中で徐々に取り戻すことができた。そういう意味では、タイ派遣初日は、私にとって最高のスタートを切ることができた日と言える。

この話合いの中で、自分にはない先生方の見方や考え方が興味深かったことであり、この派遣で重要な要素の一つであると考えた。校種が違えば、視察の観点も変わってくる。気付いたことや考えたことを、積極的にアウトプットしていくことで、一人では至らない考えにも触れることができるからだ。しかし、建設的な意見交換をしていくには、物事に対する自分の考えが重要になる。訪れる全ての場所、現地での教員や児童生徒との交流、見学する施設など、全てが自分の学びになり、考えを深めるべき場所であることを十分に理解した上で、参加しなければならないと、日本団の代表である責任を改めて実感する日となった。

(中野 彩華)

表敬訪問

タイ教育省表敬訪問

[バンコク] 2023年9月4日(月)



タイ教育省 (Ministry of Education : MoE) は、首都バンコクのジャンガセーム宮殿を含む庁舎でタイ国教育を統括している。教育省の教育資料館には、タイ王国の教育史や功績を伝える展示がまとめられている。

◆訪問内容

①副長官ご挨拶

教育長官の公務重複により、Mr.Yodsapol Venukosess 副長官 (Deputy Permanent Secretary) への表敬訪問が、国際協力局 Mrs.Phimwarat Muangnil 局長代行 (Acting Director) ご同席のもとで行われた。

副長官ご自身は6回の訪日経験がおありで、カリキュラム開発のプロジェクトにも携われてきたと述べられた。タイから日本への留学生が増加しており、高等教育段階だけでなく、初等中等教育段階でも日本型教育の関心と人気が高まっていること、日本語学校が増加していること、日本とタイの企業間パートナーシップも進んでいることなどに言及があった。今後、よ

り多くの日本人がタイ留学することや、本プログラムを通じた日本とタイの教育交流が一層促進されることへの期待を頂いた。

②団員自己紹介

各自、氏名と所属、タイとの繋がりや関心事などを短く述べた。

③代表挨拶

生田目氏より、日本団への心温まる歓迎への謝意、タイ教育省・文部科学省・ユネスコ・アジア文化センターの連携協働下で本プログラムが実施されることの意義、10月に予定されているタイ教職員日本招へい事業での相互協力などに言及があった。

④記念品交換及び記念撮影

日本団員はタイ教育省発行書籍「Thailand A Concise History」を拝受した後、副長官はじめ関係者と記念撮影を行った。

⑤タイ教育の紹介

外交部の Mr.Thiti Forksantiah 広報官 (Foreign Relation Officer) より、タイ教育省の組織およびタイ教育の概要についてレクチャーを頂いた。

タイ教育省は16局体制であり、18地域の公教育からノンフォーマル/インフォーマル教育までタイ教育政策の遂行を指導・監督している。所轄する中等学校は62校、初等学校は183校。中央執行部の5主要部門は、中央事務局(16課)、教育審議会(8課)、基礎教育部(12課)、職業教育部(9課)、教育支援部(12課)から成る。

教育統計によると、人口約7,200万人のうち3~18歳(MOEが対象とする人口)は約1,100万人・56,000教育機関となる。国内識字率は94.1%である。タイの教育制度は日本と同様、初等(3年)中等(6年)であり、中等前期教育までが義務教育となっている。

将来に向けた課題(トレンド)として、専門・職業教育の充実促進、コア教科における21世紀型スキルの

統合、ASEAN コミュニティへの統合促進などが挙げられた。

20年間の教育戦略では、1. 平和安全の向上 2. 国際競争力の向上 3. 人材育成 4. 教育格差是正に向けた平等な教育機会の提供 5. 生活の質向上に向けた環境に優しい取組推進 6. 教育行政マネジメントの改善を重点として挙げた。さらに「Thailand 4.0」と称した「創造性」と「イノベーション」を融合させた「スマート国家づくり」のための「スマートな産業・都市・人づくり」に取り組んでいく構想が紹介された。

◆意見交換・質疑応答

Q: 国際協力局 (Bureau of International Cooperation) の組織内の位置づけを再確認させてほしい

A: BIC はタイ教育省、国際機関、教育関係諸機、教育産業などの協力を促進する役割を担い、中央事務局 (Office of the Permanent Secretary) に属する。

Q: 教育委員会の役割や権限について詳しく教えて欲しい。

A: 18 教育委員会 (Regional Education Office) が 77 教育事務所 (Provincial Education Office) を統括しており、国の教育大綱や施策が実行されるよう、指導監督している。

Q: 英語教育の充実はどのようなものか。

A: バイリンガルスクールや英語コースなどの特別コースの設置が進んでおり、英語教育に力を入れている。英語圏に留学を希望する若者も多いので、それに対応できる教育機会の提供に努めている。

Q: 日本のトレンドの一つに、教育改革を文科省のみでなく内閣府や経産省など、多視点で進めようとしていることがある。タイではどうか。

A: タイにおいても人材開発は重要案件であり、イノベーション省をはじめ関係省庁とも連携している。

Q: 日本では質の高い教師確保や教員養成・研修は喫緊課題である。タイではどうなのか。

A: タイにおいても教師の給料や待遇改善の声、人材不足の課題がある。教職志望は以前に比べると高くなく、離職や退職が多いのは日本と同様の課題と言える。研修については、近年種目別に実施するなどの取組がある。

Q: 日本の全国スポーツテストは体カデータの蓄積・分析に優れている。タイではどうか。

A: 日本で体カデータ活用により教育施策や授業改善に取り組まれているのは素晴らしいこと。タイ教育でも参考ができると考える。

Q: ASEAN 統合に係り、教育現場ではどのような工夫がなされているのか。

A: 教育現場でも ASEAN 意識を向上させるために、社会科授業を中心にレクチャーやワークショップなどに取り組んでいる。

Q: 日本では、LGBTQ 等の性別多様性への対応や取組が話題になっているがタイではどうか。

A: タイには性別多様性に特化した法律はない。昔から比較的、性別多様性について、オープンかつ寛容と言えるのではないかと。

Q: 日本では道徳教育が初等・中等教育現場で大切にされているが、タイではどうか。

A: 道徳科というのはないが、宗教教育は充実している。

Q: 日本では学校管理職などの登用において、年齢や勤続年数が条件 (足枷) となり、世代交代が進まない面もあるが、タイではどうか。

A: タイでは年齢条件などではなく、実力重視による昇進・登用を行っている。その際に経験年数は評価材料の一つではある。

Q: 女性管理職の登用率などはどうか。

A: 女性管理職を増やす配慮枠などはない。前述の通り、実力や手腕によるものだ。

Q: 日本の学校で外国語科目にタイ語が選択されることはあるのか

A: 高校について言えば、自治体や各校の判断で可能

性はある。例えば過去の国際交流実績や地理的条件で韓国語や中国語などを選択科目にしている学校はある。

(竹島 潤)

学校訪問

テプシリン学校／
ナコーンラーチャシーマー・ラチャパット大学
デモンストレーション学校／ソンノン学校／
ゲンコーイ学校／

テプシリン学校訪問

[バンコク] 2023年9月4日(月)



タイのバンコク市内にある、王族をはじめ、歴代の首相や大臣も在籍していた、伝統ある中高一貫の男子校。

歴史ある学校であり、規模も非常に大きい学校であり、設備面においては日本の学校と何一つ遜色の無いように感じた。

学習面はもちろんであるが、サッカーやバスケットボール、フットサル、楽器など、日本の推薦入試のような入試方法も存在していて、まさしく文武両道を目指した学校であるように感じた。

授業においても、タブレット端末を用いた英語の授業を行っていて、最新の機器を使いながら、スムーズな授業が展開されていた。また日本語、中国語、フランス語のいずれかの授業を選択できるのだが、日本のアニメや漫画の影響が大きいのか、日本語を選択する生徒が非常に多くなっているというのも印象的で

あった。実際に、校内を案内してくれた高校生は、日本語がとても流暢で、こちらの質問に対しても、困ることなく答えており教育水準の高さが垣間見えた。授業時数などは教育庁のカリキュラムに基づいて行われており、体育の授業は週一回に1時間という限られた授業数で私自身、驚きを隠せなかった。

しかし、男子校ならではの、生徒の明るさや積極性は、至る所で垣間見られた。授業内での発言や生徒同士のコミュニケーションなど、それらを冷静に見ていると、日本とさほど変わりはないように感じていた。

また校内に設置されている記念館では、学校の創世期に在籍していた教師のドキュメンタリー映像を紹介、校舎内に歴代の卒業生の写真を掲示していたりするなど、学校全体で教師に対する尊敬の念や、上下関係の大切さ、教師や先輩に対する敬意を示すような教育が施されていることに、大きな感銘を受けた

公立学校でありながら、転勤の制度はなく、ずっと学校に教師が在籍できるのも大きな魅力になっていて、先生自身も教育のしやすい環境から転勤希望を出さないことが多いということであった。

◆訪問内容

はじめに男子学生によるタイの伝統の踊りを見学し、務められている先生と意見交換の時間となった。

学校のカリキュラムについて伺い、授業内容や生徒の実情などが質問の主であった。

不登校生に対しては、日本の学校同様にオンラインでの対応や、課題の提出などで補うようにしている。驚いたのは、素行不良で学校に来られなかったとしても、体調不良で学校に来られず出席日数が足りなくても退学にはならないということである。これは対全体で共有されていることであり、もしもそういった状況が起こった場合は、社会貢献活動、清掃活動などして反省を促すようにして生徒の心を更生していくのである。

また入試は、日本と同様に行われることから、校内の規律も守られているように感じていた。しかし、明確に日本と違うと感じたのは、体育の授業に関していえば、週に1回1時間ということで、運動能力という点では、日本の方が進んでいるように感じた。ただ休み時間に体を動かしている生徒は非常に多いのが印

象的で、制服が汗で濡れてしまうほど積極的に体を動かしていた。

質問も終え、学校内も見学したが、授業においても、生徒は落ち着いて授業に取り組んでおり、タイの教育水準の高さが見て取れた。しかし、協働、対話などの時間は少なく、教師が中心となった一方通行の授業であるようにも感じた。日本においては、現在、ペアワークや意見交換などを積極的に行い、生徒の主体性を育てる教育にシフトしているが、授業に関してはまだ少し教師中心の授業が展開されているように感じた。

ただ授業に対する生徒の積極性は、日本以上に素晴らしく感じる点も多くあり、日本に戻ったときの課題であると強く感じた。

◆学びや所感

私が今回、テプシリン学校で感じたことは、先生と生徒の関係が非常に良いという点である。生徒自身も先生を尊敬し毎日を過ごしているように感じ、先生も子どもを心から可愛がっている印象を受けた。そして何より私自身、最初の学校ということで緊張しながら臨んだものの、積極的に声をかけてくれる生徒のおかげでとても充実した時間を過ごさせてもらった。

スポーツにも力を入れながら、勉強面においてもタブレットを利用し最新の情報を取り入れるなど柔軟性があった。

クイズ形式の英語をタブレット使って回答させるなど、楽しく勉強をしていた。

授業などはアップデートしながらも、精神的な面で、教師を敬うという古き良き伝統は踏襲されるなど、今の日本からは失われつつあるものが、この学校には確かに存在していることがわかった。

全体を通して感じたことは、タイという国自体が、日本を尊敬し追いつき、追い越したいという気持ちを明確に持っているという点であった。教育や産業はもちろんであるが、サブカルチャーなどにおいても日本を超えようという心意気がヒシヒシと伝わってきた。アジ

アにおける日本の位置は、トップランナーであることに変わりはないが、10年後のタイの状況は、日本以上に劇的に変化し成長しているのではないかと感じさせる学校訪問であった。

(浅見 友記夫)

ナコーンラーチャシーマー・ラチャパット大学デモンストレーション学校

[ナコーンラーチャシーマー] 9月5日(火)



大学の付属校であり、小・中・高・大学全てある。設立当初から幼稚園と小学校に力を入れていた。大学附属なので、広い敷地面積が特徴である。

◆訪問内容

学部長兼付属学校の学長の話聞いた。

小・中・高・大学の中でも今日は小学校を中心に見て回る。今日は授業は月曜日から金曜日で、理系と英語に力を入れている。組織の構造は、上から順に管理職、科目の先生、クラスの先生である。教育において、日本はトップクラスだと思う。女性の副校長曰く、アクティビティベースラーニングを行っており、この活動を他の学校より多く行っているとのことである。

この活動の具体例は、グループワークや教え合いなどで、他には音楽やダンスなどである。小学4年~6年生で科学を学ぶ。この段階で学び始める理由は、理科に力を入れているということもあるが、高校のた

めに準備をする目的も含まれている。

幼稚園は全部で13組で、そのうちイングリッシュプログラムは1組である。5歳から入れる英語学級があり、英語に力を入れている。小学校では、普通学級が1組、イングリッシュプログラムは1組である。コミュニケーションを重視している。イングリッシュプログラムでは、体育・タイ語の授業はタイ語で行っているが、それ以外の科目は英語で行っている。あとは、ゲームなどを多く行っている。

日本では、質の高い授業、授業研究、教員養成が付属校の3つの柱であるが、これはタイでも同じであるか？という問いに対して、同じである。という回答だった。アカデミック面も大切だが、アクティビティも大切にしているということだった。

◆学びや所感

大学附属ということで、小・中・高・大学全てのあるということが、最大の特色である。しかしながら、その特徴がどのようなメリットがあるかはよく見えてこなかった。公立校ながら、様々な特色があるのはテプシリンと同様、タイ独特の教育の文化であるように感じた。話を聞いていると、大切にしている教育哲学は日本と同じであるように感じる。

(川田雅俊)

ソンノン学校

[ナコンラーチャシーマー] 9月6日(水)



中高一貫校で、「地域の特色を活かした学校づくり」をしており、地域に関するカリキュラムを取り入れ、教育を実践している。コラートジオパークと協働して「ジオパークプロジェクト」を行い、生徒が地元について「知り、考える」ことができるような教育が行われている。

◆訪問内容

まず初めに、ソンノン学校の生徒さんが日本語や英語でウェルカムスピーチをしてくださった。

【ソンノン学校校長ウィヌラート・ジャルーンチャイ先生】
日本は同じアジアであるので、意見交換がとても楽しみである。本校は、独立したカリキュラムを実施している。多様な考え方で、地方にしかできないこと(基地やラーニングセンター、ミニ遺跡などの設置)に挑戦している。

【ジオ先生】

地元の文化財は、意識をしなかったらなくなってしまう。学生と地元の方々が守ってくれている。地元を愛することが大切だと感じている。独自で実施している「ジオパークプロジェクト」では校内にある寺院や遺跡、豊かな自然を通して学びを深め、広げている。生徒たちは、国や各村の歴史を積極的に学ぶことで、地元の素晴らしさに気づき、他の地域との違いを理解している。町の歴史については、過去から現在までの流れを学習している。これからもユネスコジオパークを生徒たちに見せていきたい。

◆意見交換

Q:地元に戻って就職をする生徒はどのくらいいるか?

A:進路はそれぞれであるが、みんな地元を愛していて、就職して遠く離れてからも友達を連れて遊びに来る人も多い。一番大切なことは、「地元を愛する」気持ちを持つことだと思う。

Q:ソンノン学校さんは、日本の学校と提携を結んだことはあるか?今後一緒に活動していきませんか?

A:これまで提携を結んだことはないが、ぜひ一緒に活動していきたい。

Q:同じく、本校とも連携して活動することはできないか?

A:ぜひ一緒に行きたい。

◆学びや所感

地元の特色を活かしたカリキュラムを編成し、クロスカリキュラムで実践されていることに感銘を受けた。また、生徒さんによるウェルカムスピーチの披露や案内も素晴らしかった。

独自で実施している「ジオパークプロジェクト」は大変興味深く、校内に寺院や遺跡、豊かな自然があることは、生徒さんに素晴らしい学習環境を与えていると感じた。

ソンノン学校の先生は「地元の文化財は、意識しなかったらなくなってしまう。学生と地元の方々が守ってくれている。地元を愛することが大切。」とおっしゃっていたが、本当にその通りであると感じている。

勤務校でも、地元と連携をし「地域に貢献する人材の育成」を目指している。地元の文化財は、若い世代、そして地域の皆さんと協働しなければ、守っていくことはできない。まずは、生徒たちが地元に興味を持ち、積極的に学びに向かえるような環境を整えたい。そして、地元に誇りを持ち、地元を愛する生徒を育てていきたいと感じた。

(根岸 彩夏)

ゲンコーイ学校

[サラブリー] 9月7日(木)



サラブリー県にある共学の中高一貫校で教育省の国家教育認定を受けている。そのため、校内でカリキュラムを作成している。現在の学級数は、72学級。日本語コースをはじめとする言語が設置されており、高校に進学する段階で、生徒自身が選択をする。選択した言語の授業は週2コマ程度で、その他の時間に関しては他コースと共通した授業が展開される。

もとはゲンコーイ寺であり、その一部が学校として使用されていた。その後、学校として利用するために寄付された土地を活用して、創立された。サラブリー県の女性文化協会の後援があり、当時は Kaeng Khoi Pracha Suksa School という名前であったが、教育省と後援会の事業により現在の場所と校名になった。

◆歓迎レセプション

日本語コースに在籍する生徒が司会進行を務め、歓迎会が行われた。

- ・伝統的なタイの踊り(伝統衣装の着用)
- ・東京音頭に合わせた踊り(浴衣着用)
- ・生徒が製作した学校・地域を紹介するオリジナル動画
- ・校長・PTA 会長による挨拶
- ・日本派遣団により自己紹介及び挨拶

◆意見交換

学校の概要について説明があった後、両国の教員が自由に質疑応答をする形で交流が行われた。主にタイ側からの質問が中心に話が進んだ。

Q:日本では家庭訪問は実施しているのか。

A:実施している。4月の早い段階で各家庭に訪問したり、学校に登校することが難しい児童生徒がいる場合には、状況に応じて訪問したりすることがある。

Q:生徒のスマートフォンの使用に対する指導に悩んでいるが、日本ではどのようにしているか。

A:原則中学校ではスマートフォンの学校への持ち込みは許可していない。高校では、登校後に担任が回収し、安全な場所で補完しているため、授業に支障は少ない。しかし、管理や指導については、学校によって違いがある。

Q:情緒面で不安定な生徒が増えてきている。タイの学校ではどうか。

A:人数は多くはないが、タイの学校でも同様に、通学するのが難しい生徒も数人いる。カウンセリングをするために、隣町から担当の医師を呼んで、相談に乗ってもらえるような環境を作っている。

Q:日本人の小学生の英語力が高くなっているように感じた。何か英語学習で工夫をしているのか。

A:小学校1年生から段階的に対話的な英語学習ができるようにカリキュラムが変化してきている。

Q:読み書きが苦手な生徒は日本にもいるか。

A:ひらがな・カタカナ・漢字と複数を学習する必要があるため、次の学年までに定着しないまま進級してしまう児童も少なくはない。

◆学びや所感

1. 情緒面に課題を抱える児童生徒の対応について

タイの学校でも同じような課題を抱えていることに素直に驚いた。それは、ゲンコーイ学校で1日過ごす中で、先生と生徒との距離感が近く、よい関係が構築されているのだと感じていたからだ。子供たちが気楽

に先生に話ができるというのは、悩みや困り感を抱えたときに、我慢せずに相談することにつながらと思う。数人は課題を抱える生徒がいるものの日本ほどではないのは、それが理由の一つではないかと思った。

また、対応についても柔軟で、オンライン動画配信といった生徒の学習の機会を保障するものであり、可能な範囲で日本でも取り入れることができればよいと考えた。教員として学習の機会を保障することも重要な役割である。現状、学校に来ることが難しい児童生徒を無理矢理登校させることは現実的な解決策ではない。タイが実践するように現代だからこそ活用できるツールは複数あり、積極的に活用していくことで、本来であれば授業を受けているはずの時間を、無駄にすることなく、かつ本人の安心できる環境で受講できることを考えると魅力的な方法であると感じた。

2. 生徒の日本語力の高さについて

司会進行や学校の歴史の説明など、流暢な日本語で話す生徒が非常に印象的であった。週2コマの授業では到底習得することができるレベルではないように感じたため、日頃、生徒自身が学びや日常生活の中で積極的に日本語に関わっている成果であると思った。実際に、日本の文化(アニメや折り紙)などに関心をもっている生徒が多く、一人一人の関心に合わせた学びが、明確な成果につながっていくことを目の当たりにした。

限られた授業時数の中で、生徒が力を付けられるのは、日本語の授業を担当している教員の日本語力の高さにも依存することがよく分かった。教員自身が繰り返し日本に来日し、日本語を使って生活する経験を重ねている。リスニング力も高く、言語話者としての手本が指導をしてくれるということは生徒にとって何よりの刺激になる。言語指導者として、対象の言語を流暢に話せることの重要性を痛感した。

(中野 彩華)

◆学校見学

校内施設の説明では、日本語コースで学んでいる生徒さんが、日本語で紹介してくれた。

授業見学では、タイの伝統的な踊りをする授業があり、私たち日本団も踊りを教えてもらい、踊りを披露した。

手や足の動きが難しく苦戦したが、タイの生徒さんが優しく教えてくれ、素晴らしい体験ができたと感じている。

調理実習をしている授業にも行き、実際にタイの伝統的なお菓子（練り物）を作ることができた。細かい作業で最初は難しかったが、日本団の先生方はみんな楽しそうに取り組んでいた。タイの生徒さんともお話をしながら体験することができ、とても良い交流だった。

◆昼食中

タイの生徒さんによるパフォーマンスタイムがあり、タイの伝統・文化を感じることができた。

◆文化交流授業

3つの体験コース（①日本のスポーツ ②日本の伝統文化 ③日本の教員との意見交換）に分け、それぞれのブースを15分ごとに体験してもらった。

○タイの生徒の感想

・日本の先生方と交流したり、話したりすることができて、本当に嬉しくて楽しかった。

・日本の先生と話することができて、このゲンコーイ学校に入学して本当に良かったと感じた。

感想をもらった後は、フィナーレとして、「恋するフォーチュンクッキー」のダンスを披露した。タイの生徒さんは、嬉しそうに見てくれ、途中からは全員で踊った。そこにいた人全員の気持ちが一つになったような感覚があった。別れが寂しく、涙を流す生徒さん、先生方がたくさんいた。

◆学びや所感

中高一貫校で有名なゲンコーイ学校では、社会の変化に柔軟に対応したカリキュラムを実施している。生徒さんたちが、自主的に、そして楽しみながら学びに向かう姿が印象的であった。

生徒さんが、校内の施設説明を日本語でしてくれたことには本当に驚いた。また、授業に混ざり、タイの伝統的ダンスを教えていただいたり、調理実習で練り物を一緒に作ったり等、貴重な体験をさせていただいた。あたたかく迎えてくださったゲンコーイ学校の先生方、生徒さんの笑顔が忘れられない。

先生方とのディスカッションでは、日本へのイメージ、

言語を通じた国際交流、SNSと生徒の関わり、しつけについて等、多岐にわたるトピックで意見交換を行いとても充実した時間だった。

午後に実践した文化交流授業では、私は初めて海外の子どもたちに対して授業を行った。1時間という短い時間ではあったが、タイの生徒さんと向き合う時間が本当に楽しく、一瞬で過ぎてしまった。反省点も多くあるが、生徒さんの笑顔をたくさん見ることができ、素晴らしい時間を共有することができた。

最後に生徒さんが感想の中で言っていた「日本の先生方と交流できて楽しかった。この学校に入って良かった。」という言葉が忘れられない。生徒が自分の学校に対して誇りを持てるような教育をしていく必要がある。同時に、国際交流の素晴らしさを再確認した。「また戻りたい。」そのように思わせてくれる学校だった。

（根岸 彩夏）

教育文化施設 訪問

コーラート化石博物館

鉄道局

タンマチャック・セマラーム寺

カオチャンガム洞窟

ヤイティアン・クエスタ

王宮とワット・プラ・ケオ

ワット・アルン

コーラート化石博物館

[ナコーンラーチャーシーマー] 9月6日(水)



バンコクから北東へ約 260 km、タイ東北地方の最大の都市にしてその玄関口に位置するナコーンラーチャーシーマー県に所在するタイ国王及び東南アジア初の化石博物館である。1994 年の「今後 10 年間のコーラートの天然資源と環境会議」を発端に、2018 年に正式に開館した。

崩御後の現在も国民から絶大な支援を集めるラーマ 9 世の次女であるシリントーン王女殿下が関心を寄せ、オープニング式典に来訪したことで有名である。

博物館には主に 3 種類の展示エリアがある。一つ目が珪化木エリア、二つ目がゾウ化石エリア、そして三つ目が、恐竜化石エリアである。

また、化石の展示のみならず、宇宙の起源と地球生命の進化についての映像展示も充実している。

◆化石博物館の概要

- ・場所は、タイの東北部
- ・面積は、約 3200 平方メートル

◆特徴

恐竜の時代から現在までに至り、いろいろなかたちが未だに残っているのは世界的にも特徴的であるとのこと (Double Cuesta ダブルクエスタが特徴的)。

- ・コーラートクエスタは隣の国まで続いている
- ・見所はジオサイトであり、教育センターなども含まれている

◆沿革

高速道路が欠損したときに化石が発掘されたことが契機となった。1994 年、プラティハシマ先生が政府にはたらきかけ大きなニュースとなった。その後、先生方やお坊さんらの尽力により化石が集められた。集めた化石はどこに置くべきか議論となり、プラティハシマ先生の提案で、博物館設立の機運が高まった。

この博物館を作ろうとなったとき、関係者と何回もミーティングを実施した。大学等から協賛をもらったりタイ教育省からも支援いただいた。現在、建物は 17 カ所ある。そして、もう一つの特徴は幅広い植物が育っているところである。地質的な町というコンセプトを確立。なぜこのコンセプトかという、発掘された恐竜は、いろいろな時代のものであることがわかったためである。また、いろいろな植物もある。なかには、80 年前のものもある。

発掘に関しては、日本の福井県の大学と共同プロジェクトを行っている (約 20 年)。

◆質疑応答

福井の大学との連携について…今後恐竜学部を作る予定。

スタッフ人財について…大学とのコラボが多い、各省にも協力仰ぎ総合的な人材を活用。一番大事な人材はコミュニティの人。地域を大切にしてくれる。

◆学びや所感

化石博物館の大切さの認識を高めるために本やリーフレットなどを作ったり、デパートの中や学校の中でも小さな展示会を行ったりしているなど広報活動にも尽力していることがわかった。また、発掘体験等の体験活動や「モニュメントを置きましょう」というキャンペーン、お土産や民芸品に恐竜などを入れ発信するなど、子供をはじめ多くの人に興味をもってもらえているようである。さらには、編み物や伝統品にも恐竜のデザインを落とし込んだり、化石発掘体験の教育キットも作成するなど工夫を凝らしている点は参考になった。

これらのことは、地域資源を活用したダイナミックな教育活動の展開につながるものだと考えられる。本邦において、カリキュラム・マネジメントの推進に欠かせないのは、地域資源・人材の活用である。私が勤務している学校のように過疎化が急速に進行している地域ではなおさらのことである。まさに、本活動ではその有効的な取組を目の当たりにすることができた。地域に根ざした教育さらには郷土愛を育むことのできる環境に刺激を受けるとともに地域連携の重要性について再考することができた。

また、地域の発展や物理的な距離が支障となり集客できていないなどの困り感についても、共感できる部分があった。

(後藤 幸洋)

◆コラート化石博物館の研究セクション

館内専用の移動車に乗って、研究セクションを巡った。

1. 収集した化石の保管所

これまで収集された化石が保管されている収集室にて、化石の見学を行った。化石の種類によって、保管する棚が分けられており、湿度や気温が高くなりすぎないように、室温も管理されていた。

保管されている化石の種類は、恐竜や象、亀、魚などの生き物に限らず、木や葉の化石を見ることができた。

2. 化石クリーニングの見学・体験

博物館の研究員が日々化石のクリーニングを行っている。化石の大きさによっても作業時間は異なるが、一日平均2時間以上は作業をしている。削る際に出る粉塵は吸い続けるには有害であるため、長時間の作業は難しいとのことであった。作業室の前には、クリーニングが済んでいない大量の化石がプラスチックの箱に入っていた。日付や発掘地が記されており、順次クリーニングが進められていくという。また、クリーニングには専用の道具を必要とするため、一部の化石は、福井県に送られ、協働で作業をしていく。

日本派遣団からも数名の教員がクリーニングの体験をした。誤って化石を傷つけることのないように、慎重に作業に臨む姿が見られた。

3. 化石採掘場について

化石は、農場から発掘されることが多い。ジオパーク周辺の農作物が十分に育たなかったり、不作だったりした場合、農場の地中に調査が入るといふ。大抵、化石が埋まっていることがほとんどであるため、その場合は農作業を中断し、地元の人々と協力して発掘の調査を行う。発掘終了後は、再び農地として利用されるという。

発掘体験も行っており、対象は小学生～高校生。

◆学びや所感

1. 化石に触れてみての所感

私自身人生で初めて、化石に触れるという体験をした。地元の郷土博物館などで葉の化石のレプリカを見たことがある程度で、本物の化石に触れる体験は、貴重なものであった。数千年の歴史を感じる神秘的な瞬間でもあり、当時の形をそのまま目にできる感動は、日本に帰って子どもたちに共有したいと思った。

化石の形や大きさが今とは全く異なるものであったり、逆に今とほとんど変わらないものであったりと、生命の進化や維持の不思議さを目の当たりにした。博物館の職員の方々が目を輝かせながら話すのも納得できた。研究すればするほど、生命や自然の向こう側が見えてくるのだろう。

2. 化石クリーニングの体験

上述した内容を実感したのは、化石のクリーニングを体験したときであった。化石を削るための道具は、手になじみの太さで、鉛筆と同じような形をしていた。

先端はドリルのように高速で回転するのだが、深く化石を削りすぎることのないくらいの威力で、削る際にこちらの加える力に依存する。この絶妙な力のバランス工夫しながら進める作業は、時間を忘れさせるほどであった。少しずつ見えてくる化石に、次第に愛着がわいてきて、時間制限があることにわずらわしさを覚えるほどであった。それ故に日々研究をする人々にとって、化石は夢があるものだろうということ、作業後に感じた。

3. 福井県との共同研究

今回の視察中で、福井県が化石の研究に力を入れていることも初めて学んだことの一つである。タイでの体験を通して、新たな日本の一面を見つけることができ、今回の派遣があったからこそ気付けた日本の魅力であると思った。帰国後は、福井県を訪れ、改めてジオパークで学んだことを振り返るのも悪くない。
(中野 彩華)

タンマチャック・セマラーム寺

[ナコーンラーチャシーマー] 9月6日(水)



タイ王国ナコーンラーチャシーマー県ソンノン地方、中心部マーケットから5キロ北西に位置し、ムアンセマー遺跡から500m北西にある同県にある化石博物館、ソンノン学校、カオチャンガム洞窟(絵画が有名)などから近いエリアにある。

ドヴァラヴァティ砂岩涅槃仏は12世紀仏教時

代、スリカナサプラ王国で建てられたもので、人類が岩石と繋がっていることを示す貴重な文化遺産である。一般的に、釈迦の像は立像、坐像、涅槃(ねはん)像の3種類に大別されるが、涅槃像は全ての教えを説き終えて入滅せんとする姿を顕すとされている。本寺院に祀られる涅槃像は、釈迦がニルヴァーナ(仏教で煩惱を滅尽して悟りの智恵を完成した境地)にある様子を表しているとされる。

地元のコミュニティ、学校、寺院はこの場を共同管理し、教育と観光の両面から大切にしている。

①ドヴァラヴァティ砂岩涅槃仏の見学、祈り

地元の児童(生徒)が先生と思われる大人とともにお花を飾ったり、清掃したりしに来ているものと思われた。

入口付近でお祈りの花輪を受け取り、小さな仏像群に礼をして会場の奥に進んだ。赤砂土で作られた涅槃像はタイ及びASEAN域内で最古のものであり、長さ約13.3m、高さ2.8mとなる。砂土で作られた仏像としてはタイでもっとも大きいものでもある。AD(紀元後)657年に作られたものとされる。頭部は北向きで、顔は東向きである。顔部は4つの厚い四角部分が垂直に積まれてできている。

その大きな赤砂土でできた涅槃像の前には、同じく涅槃像の小さなサイズのものが金色に輝きを残して安置されていた。団員たちはそこで、静かに座り祈りを捧げた。

②タンマチャック・セマラーム寺の見学・レクチャー

その後、敷地内を徒歩で移動し、小さなお堂に入った。そこには、出土した柱の跡や貴重な遺跡の一部が展示されており、ソンノン学校の先生(社会科)より説明をいただいた。

法輪 dharmacakra とは、仏教の教義を示すものとして、八方向に教えを広める車輪型の法具。法輪は仏教の教義、特に釈迦が説いた教えのこと指すので、ここで発掘された法輪 dharmacakra は、赤土で作られており、直径1.41m、車軸は31cmあり、底面にライオンの頭の肖像画が飾られている。歴史的文化的価値の高いものであると感じた。

敷地内には、サラソウジュ（仏教で最も重要とされる木で「生命の樹」とも称される）の木がある。ブッダはインドでサラソウジュの木陰で生まれたとされる。この地のサラソウジュは1972年に植えられたものと知った。

また、他にタンマチャック・セマラーム寺院の前職の大僧侶 Luang Phu Jang の金の彫像も保存されているそうだ。同僧侶はその行いが素晴らしく、村人から最も多くの称賛を得ていたことで有名だという。

◆学びや所感

コラート州と呼ばれるこの地が化石博物館やユネスコ認定のジオパークなどの自然地理的なことだけではなく、ドヴァラヴァティ砂岩涅槃仏やタンマチャック・セマラーム寺の遺跡や展示物全般など、歴史的・人文的にも貴重な価値を擁していると知り、大変感心した。

首都や都市部ではなく、静かな山間部にあることで、遺産が守られているところもあるのだろうと思った。地元で歴史的、自然的な価値あるものが資源として保存・継承されており、それを生かした学びが地域や専門家のアシストもあり継続・発展できるというのはまさにESD（持続可能な発展のための教育）実践だと考える。直前に訪問したソンノン学校の生徒や先生方の地域や学校への愛着と誇りの裏付けとなるものを見せていただいた思いであった。

個人的には、自身の勤務校も自然と歴史の両面で豊かな、優れた資源を有しているので、それを共有する流れを繋いでいきたいと決意することとなった。

（竹島 潤）

カオチャンガム洞窟

[ナコーンラーチャシーマー] 9月6日(水)



洞窟は約4000年前のものである。ペイントは、当時の生活の様子を表しているものと推察されている。例えば、男性たちは狩りをしていたり、女性は子どもと遊んでいる様子が伺える。女性は妊婦と思われるものもある。雨などの影響により、ペイントが剥がれ欠けているところもあるが、その生活様式は十分伝わるものがある。

◆視察内容

専任ナビゲーターが中心となり、本プログラムは展開された。

洞窟は、ややきつい勾配の坂を登る。ペイントは、当時の生活の様子を表しているものだと捉えることができた。雨などの影響により、ペイントが剥がれているものの、その生活様式は十分に理解できた。ペイントに使用されたとされた“赤土”は独特の触感であった。

全体的に独特の雰囲気漂い、雨が降っていたこともあってか、神秘的な空気感であった。また、日本ではあまり見ることのない植物やサイズ感の異なる昆虫なども見ることができた。

専用のグッズショップもあった。“赤土”をイメージした店の作り、さらには壁画をモチーフにした配色やデザインのお土産品もあり好感がもてた。

敷地内には、高齢者や障害者など坂道を上ることができない人のために、実際の絵画を模倣したものが描かれていた。「ユニバーサルデザイン」の考え方に

類するものであり、運営者の配慮を感じることができた。

参加者は、神秘的な雰囲気にも圧倒されながらも、積極的に記録をとるなどして主体的に本プログラムに臨んでいた。

◆学びや所感

本プログラムを通して、当時の文化や生活様式、すなわち社会のあり方そのものを感じ取ることができた。また、その地に暮らしていた人々が何を受け入れ、または何を排除したか、という価値観を見取ることができる。

例えば、この洞窟は、誰もいない静かな場所であったことから、①今でいうお寺としての位置付け、②儀式的の場所などとして活用されていたとのことである。

専任ナビゲーターの説明を聞きながら見学することで、「いつそこに何があったのか」という視点ではなく「なぜ、その人たちがそのような行動をとったのか」という見方・考え方ができた。

このことはまさに探究的な学習に共通するものであり、歴史学習や背景を読み取る授業では、このような見方・考え方を心がけていくことが大切だと感じた。

(後藤 幸洋)

ヤイティアン・クエスタ

[ナコンラーチャーシーマー] 9月6日(水)



コーラート aUGGp のクエスタ景観の最高のビューポイントの1つで、タイ発電庁 (EGAT) と呼ばれる政府機関が管理するポンプバック水力発電所の上池にある。

EGAT は、地質学と自然に関する知識、ストーリーテリング、教育活動を拡大するために、天然資源の保護、地域経済開発、イノベーション管理、そして Khorat aUGGp との協力に関する使命を組み合わせている。Khorat aUGGp と提携し、ジオパーク ルートトレイルの1つになった場所である。

ヤイティアン・クエスタサイトでは遠くに聳えるクエスタを見る予定になっていた。バスの中で一通り説明を受けたのだが、雨と霧が激しかったため、はっきりと見るができなかった。

ただ、ラムタコンダム貯水池の大きさには、団員一同驚きを隠せず、思い思いにその場で写真を撮るなど、ダムや風車などの景観を楽しむこととなった。しかし途中から雨が強くなってきたことや時間の関係で、早く出発することになった。

この施設に関しても JICA や日本企業が関わっているということから非常に大きな役割を日本が担っていることが理解できた。

◆学びや所感

この日は様々な文化施設を見て回る日であり、最後に訪れたのがこのヤイティアン・クエスタサイトであ

った。本来であれば、ダム先のそびえるクエスタが美しく見え、さぞかし優雅で壮大な景色であったことは想像に難しくなかったが、当日はあいにくの天気で、霧に包まれた姿しか見る事ができなかった。

しかし、その場には大きな発電のために形成されたラムタコンダム貯水池の上池をはっきりと見ることができ、タイの発展を垣間見ることができた。詳しく説明を受ける中で、この池の下にもさらに池が広がっていると聞き驚きを隠すことができなかった。

またこの施設の建設に当たって、日本はJICAが事前調査を行い上・下貯水池を利用するための地下発電所の建設や送電線、変電施設の建設など多岐にわたり支援したそうである。この施設の完成により、バンコク首都圏には電力ピーク時も安定的に電気を供給できるようになり、更なる経済成長の一端を大きく担うものとなった。

また風力発電の設備として風車も併設されていることからこの場所がタイの国内発展の重責を担っていることが見て取れた。

日本国内で生活しているだけでは、日本企業が海外でどのように各国を支援しているのか、また協力しているのかが決してわからなかったことが、タイに行って知ることとなった。

(浅見 友記夫)

王宮とワット・プラ・ケオ

[バンコク] 9月8日(金)



王宮は白壁に囲まれた20万㎡の敷地内にエメラルド寺院と隣り合って建てられている。王宮は1782年にラーマ1世即位後、建設された、タイ国内の宮殿で最も権威あるものであり、王室の重要な祭典などでも使われている。宮内庁や官庁なども含め、四方1,900mの壁に囲まれた面積218,000㎡の敷地内に建てられている。

ラーマ4世、5世、6世と歴代の王たちによって、芸術の粋を凝らして建造・改築された建築物が立ち並んでいる。

敷地内には2012年5月にオープンしたシリキット王妃テキスタイル博物館もある。

広い敷地に入り、専属のガイドによるツアーが始まった。上部テラスのロイヤル・パンテオンやプラ・モンドップ、アンコール・ワットの模型などを見学した後、ホー・プラ・モンティエンタムと呼ばれる建物などを見て回った。

そして、いよいよエメラルド寺院に到達した。寺院は「ワット・プラ・ケオ」と呼ばれ、1782年にラーマ1世が現在の王朝、チャクリー王朝を開いた時の護国寺として建立したものである。王室の守護寺院として、タイで最も美しく華麗な歴史と伝統に裏打ちされた寺院。敷地内の黄金の仏塔には、仏舎利(仏陀の遺骨)が納められている。

本堂内は風通しがよく、神々しいが穏やかな時間が流れる空間である。「仏陀の一生」や「仏陀の前世」などが見事な壁画で表現、装飾されている。観光客の写真撮影等は禁止されており、時折、警備員の「No Photo!」の音が響いていた。

屋内のエメラルドブッダは、実際は緑色の翡翠で彫られたもので、膝幅48cm、高さ66cmほどである。仏像は1500年代から226年間ラオスに留まり、1778年に再びタイに持ち帰られた経緯がある。季節に合わせて、年3回衣替えを行うが、これは暑季、雨季、乾季のいずれも国王自らが行うそうだ。王宮の鐘楼を僧侶ではなく、王室の者が鳴らすということも印象的だった。

ここワット・プラ・ケオは、毎年4月のタイ正月には、地元の人々が多く参拝するという。エメラルド仏に呪文を唱え、強い信念で祈る事で金運が上がると信じられているそうだ。

エメラルド寺院は王室専用の寺院なので、僧侶が住むことも僧侶を見かけることもない、というのも印象的だった。回廊には、ラーマ1世の時に描かれたラーマキエン物語が描かれているが、その後何度も修復されている。特にタイ様式と西洋様式(バッキンガム宮殿を想起させる)が一体となった建築物、チャクリー・マハ・プラサート宮殿は、ラーマ5世が1882年に完成させたもので、現在はレセプションホールとして使用されるなど、名高い。この他、ドゥースイット宮殿、ポロム・ヒプマーン宮殿、プラ・マハー・モンディエン建物群などがある。

◆学びや所感

タイ王国が仏教と王室を大切にしている国であることが、歴史と伝統ある荘厳な建造物や仏陀像などからまざまざと伝わった。また、カンボジアやラオスなどの近隣国と旧王朝時代から繋がりが深く、少し似たような彫刻や建造物があることにも気づけた。

タイの寺院の外壁や内部の装飾は大変きらびやかだが、もともとは朱色の木造建造物然としていたという。それが、歴代の王によってより見事に装飾されたり、補修されたりしてきたことを知り、王室の連綿とした伝

統を感じる事ができた。

壁画や回廊に描かれた物語は、内容そのものはよく分からないが、神聖で代々伝わる、敬われるべき物語であることは伝わった。

王宮に国民や観光客が立ち入り、見学できることは王室と国民の繋がりを維持する上で望ましい効果を持っているのだろう。洋の東西や世代を問わず、多くの観光客が訪れていた王宮とエメラルド寺院をはじめとした歴史的宗教的建築物を見学できたことで、タイ王国の分厚い歴史への関心を高めることができた。

(竹島 潤)

ワット・アルン

[バンコク] 9月8日(金)



タイ国政府観光庁によるとワット・アルンの正式名称は、「ワット・アルン・ラーチャワララーム」といい、「暁の寺」という意味を表すとのことである。ワット・アルンは、バンコクのバンコクヤイ川地区トンブリー西岸にある仏教寺院である。建立は、アユタヤ時代に遡り、寺院の名前はヒンズー教の神アルナに由来し、その名から夜明けの象徴とされている。タイで最も有名なランドマークのひとつとされている。

寺院は少なくとも17世紀から存在していたとされ、その特徴的なプラ・プラーン(堂塔)は、ラーマ2世の治世中の19世紀初頭に建てられた。タークシン大王の治世にトンブリーへの首都移転を計画中に川を進行していたところオーブ寺の前に到着したため、以前は「オーブ寺」として知られていたが、ラーマ1世の即位までワット・チェンと改名された。しかし、ラーマ1世は完成前に亡くなったことから、ラーマ2世がその後修復を完了させ、寺院名を「ワット・アルン・ラーチャワララーム」とし、現在に至る。

本プログラムでは、ワット・アルンの敷地内で散策するとともに、見所とされている「ヤック」や「仏塔外観のモザイク模様」を中心に見学した。

まず、ワット・アルンの「山門前」には、大きな2体の「ヤック」が門番を務めている。「ヤック」は、日本でいう「夜叉」と呼ばれており、タイでは人気とのことである。その独特の表情は、私たちの心を引きつける不思議

な力を醸し出していた。

次に、ワット・アルンは、5つの仏塔で構成されており、仏塔の表面は陶器片で飾られていることから、とても素晴らしい輝きを放っていた。階段で登ることも可能で、バンコクの眺めを楽しむこともできた。

なお、ワット・アルンに入るときは、男女ともに適切な服装が求められる。例えば、露出した服装はNGとされ、肌が露出していたり、へそが見えていたり、足が見えてたり(7分丈が目安)と体が見える服装はNGとのことである。

◆学びや所感

「仏塔外観のモザイク模様」を眺めていると太陽の光が寺院に反射し、真珠のような虹色の輝きを放つ光景に心が奪われた。日本では体験することのできないデザイン性や芸術的感性を養うことができた。そして、寺院の作りや装飾を細かく観察することを通して、タイの歴史や文化について改めて思考する契機ともなった。

また、タイの民族衣装も体験することができ、服飾文化や着装、被服の構成や特徴、性能について深く考えることができた。縫製方法や着装については、日本の授業でも十分に活用できると思われる。

本プログラムを通して、ワット・アルンがタイで最も有名なランドマークのひとつとされている理由を体感することができた。多くの観光客を魅了するその景観をまたいつか眺め再び魅了されたいと思う。

(後藤 幸洋)

プログラム 評価会・閉会式

タイ教育省

[バンコク] 9月8日(金)



○国際協力局長:チトラダ氏のご挨拶

長い間コロナでオンラインしかできなかつたので、今回オンサイトで皆さんを迎えることができとても嬉しく思う。2019年のコロナの前に、このプログラムに参加したことがある。その時は、徳島の中学校を訪問することができた。学校訪問だけでなく、日本人との交流プログラムも参加することができた。このプログラムのおかげで、意見交換の必要性を強く感じた。最後になるが、このプログラムの関係者皆さんに感謝申し上げます。短いプログラムではあるが、この経験が日本で活かすことができるのではないかと思います。またタイに来てください。

○竹島:

改めて、日本教師代表団を受け入れてくださってありがとうございます。今日、最終日ということで、記録動画を見て、熱い気持ちで歓迎をいただいたということを出している。私がタイの教育に関心を持ったきっかけは2019年の神戸の講演会である。その時も、団長が岡山県の小学校の浅野先生である。対面

交流が復活し、岡山から団長拝命し、交流ができたことを貴重な経験と受け止めている。

今回の事業の目的である、タイの文化の交流、タイの教師とのネットワーク、そして友好親善ということだが、このプログラム中のレクチャー、学校訪問、意見交換、授業参観、実施を通し、多くのことを得られたと思う。特に、現場の教師として、それぞれ特色のある4校を訪問できたのは貴重な経験だった。

王室と繋がり深いテプシリ、ナコーンラーチャシーマーラチャパット大学と連携しているデモンストレーション校、地域連携に強いソンノン学校、グローバルシチズンシップを強みとしているゲンコーイ学校。日本でもそれぞれの強みを活かした教育実践が求められているため、そのこのような学校を訪問できたことはよかった。日本の公立中学校であれば、3~7年くらいで転勤するのが常である。だから、赴任した学校の特色を生かし、教育実践をするのが大切だということを団員は学んだはずである。

特に、ソンノン中学校とは、同じ地域の特色を生かした教育を実施しているため、交流を校長とも約束している。日本の様々な先生方も交流ができたことも収穫だった。学校や自治体は違うが、二十代後半から、四十代前半という最も油の乗った教員たちが集まったことは貴重な経験であった。日本では、有言実行や、武士に二言なしという諺がある。今回のプログラムで学んだことを、早速実践していこうと思う。

最後に団員として、全てのプログラム関係者が健康にプログラムを終えられそうであることにほっとしている。ありがとうございました。

○後藤:

今まではタイ語で自己紹介してきましたが、最後なので、しっかりと日本語で気持ちを表現したと思う。まず、管理職という立場で参加できたことが有意義だと感じている。私は、日本の北海道というところで勤務しているが、少子高齢化で学校の数がどんどん減っている。そして、今後ますます、この少子化が加速することが喫緊の課題となっている。

そこで、このプログラムに参加して、自分の学校の地域で、どのような連携をして、学校の強みを活かそうとしているのか感じたく、このプログラムに参加した。各校の校長先生や副校長先生との対話を通して、自分の学校の特色をしっかりと把握していた。

改めて、自校の強みを理解することの大切さを実感することができた。その一方で、小さな学校から、このようなプログラムに参加できるんだということを夢を持って教職員に伝えていきたいと思う。最後になりますが、改めて、お招きいただいたことを心より感謝申し上げます。

○浅見:

今回このプログラムに参加させていただいて、心より感謝申し上げます。私は体育を通して、様々なカテゴリーに所属する子どもたちを見させてもらった。その中で、タイで日本と同じように体を動かしている子どもたちの表情を見て、心を動かされた。私自身どうしても、英語、国語、理科など5教科をリスペクトしているので、体育という科目に自信が持てなかった。

しかし、今回文化授業を通して、スポーツは世界をつなぐということを確認したので、子どもたちを通して、貢献できるように邁進していきたいと思う。このような素敵なプログラムに招待していただき、本当にありがとうございました。

○根岸:

高校で英語の教員をしております。この6日間、本当にターニングポイントになるようなかけがえのない経験になった。先生方と本気で話し合ったり、生徒と話をする時間は、たくさん考えて、毎日充実した日々になりました。また、プログラムの細部まで作っていただき、日本の教職員が充実できるように環境を整えてくださったことに感謝申し上げます。

私自身、自分の意見を相手に伝えるのが苦手でしたが、受け入れてくださる人がいるので、話を伝えることができた。なので、すごく自分が変わるきっかけになったことにも感謝をしております。私が印象に残っているのが、昨日訪れたゲンコーイ学校の生徒の言葉ですが、「この学校に入ってよかった」という言葉で、自

分の生徒にもそう思ってもらえるようにしないといけないと感じた。

このあと、日本に帰ったら、私が学んできたことをできるだけ細かくたくさんの人に伝えて、今回自分が参加したという、この6人に選ばれたという責任を果たしていこうと思います。ありがとうございました。

○中野:

小学校の先生をしています。このプログラムに参加するきっかけは、タイの大学生と交流をした時に、どうして英語がこんなに話せるんだろうと思ったのがきっかけである。なので、今回どのように英語の授業が行われているのかを注目していた。

その中で、多くの共通点を見つけた。我々日本人の教員も一緒ですが、どうしたら子どもたちが深い学びができるのか、どういう躰をしなければいけないのかを考えているということでした。日本でも英語の重要性は増してきて、近年科目化された。タイでもイングリッシュプログラムが実践されていることを知った。一方で違うところも見つかりました。

今朝、オンライン授業で日本の子どもたちはタイの街並みにとても興味を持っていた。子どもたちが、自分の力で調べたり、興味を持つことが大切だと感じている。他の先生方もおっしゃっていた通り、自分たちの教育のありかたを再考していこうと思う。

○川田:

小学校で3年生から6年生に英語を教えています。私は先月にラオスを訪問しました。ラオスとタイの町並みを比較したときに、発展の差が幸福度に必ずしも関係があるわけではないが、どうしてこうも発展の差があるのだろうかと感じた。私は、学校では若手として扱われているが、このような名誉あるプログラムに参加することができたから、これらの経験を活かし、学校を引っ張っていかなければいけないという責任感を感じている。今回は、このプログラムに参加させていただき、ありがとうございました。

○伊藤:

長い期間、プログラムをサポートしていただきあり

がとうございました。プログラム終了後は、これから一人一人がタイとの交流をしていくことを我々としては期待している。私は ACCU から来たので、先生方と違う視点でプログラムを見ていた。

大切にしているのは、「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心に寄り添わなければいけない」という理念である。学校での取り組み、学校と地域との関わり、そういう心がタイの皆さんに体现されていると感じた。この6日間でタイの皆さんが大切にしていることを肌で感じる事ができた。

プログラムはここが終わりではなく、始まりだと感じている。コーラートの前で3つの思いを祈った。まずはプログラムに対する感謝である。改めて、タイ教育省、学校のみなさま、ジオパーク関連の皆様に感謝している。2つ目は今回、モチベーション高い先生方が無事に事故なく日本に戻れることを祈った。先生方は未来に触れられる存在だと思っている。最後にタイと日本の交流が発展し、未来と一緒に作っていく存在になれるようにと願いを込めた。今回は本当にありがとうございました。

○生田目:

文部科学省から参りました生田目と申します。今回は先生方を招いていただきありがとうございます。訪問先の先生方は全力で歓迎してくれたし、このような機会を本当に感謝している。そして、対面交流の大切さを再認識した。先生方の間で、会話をしていく中で、熱量が高まっていくのを肌で感じた。

今週、ちょうど ASEAN 関連の首脳会談が開かれた。ちょうど日本は ASEAN と交流が始まって50周年という記念の年になる。そこで、日本政府として今年12月に日本でプラススリーの特別の首脳会合が開催される。その場では、人と人の交流が大切だとプライオリティーが掲げられることになっている。

文部科学省としても人を育てるということに携わっているから、どのように交流をすべきかと考えているところである。私は、自分の担当の仕事として、中近東、南米、ASEAN 地域を担当している。その中でも ASEAN との活動が最も活発なので、仕事も ASEAN

地域が最も多い。なので、これからもタイとは交流をさらに深めたいと思っている。来月はタイの皆様が日本を訪れるということで、楽しみにしている。

○国際協力局長:チトラダ氏

皆様の感想を聴き、本当に一生懸命参加されことを感じた。自分で見たことを通して考えられたのではないかと思う。交流プログラムは何回も続けていこうと考えている。こちら、準備の段階から関わってくださった文部科学省、ACCU の皆様に感謝している。このプログラムだけではなく、MEXT というんなプログラムを組んでいきたいと思っている。どうもありがとうございます。

(川田 雅俊)

リフレクション ミーティング

タイ滞在のおおよそ1か月半後にオンラインで日本訪問団が集まり、参加者がそれぞれの考えや思いを共有し合いながら、プログラムを振り返りました。タイ滞在について振り返るばかりでなく、プログラムでの気づきや変容、学びのみならず、帰国後の取組や今後の交流や意気込みなども併せて語り合いました。

フォローアップ・リフレクション ミーティング

[オンライン] 10月28日(土)



当日は、参加者がそれぞれ語り合う機会として、次のテーマに沿って2グループに分かれて活動しました。

- ・グループワーク①(タイ滞在中のご自身について)
- ・グループワーク②(文化的多様性や異文化理解について)

[タイ滞在中について]

グループ①

浅見先生:

12月に学年でタイのことを人権・道徳の授業で発表する予定がある。公開授業として他の先生にも参観していただく予定。タイ滞在を経て、前よりも海外への興味をもつようになった。スポーツの価値、コミュニケー

ションツールとしての活用について考えた。竹島先生の幅広い活動を参考にしながら、子どもたちに国際感覚を持つことの重要性、伝えることの大切さを感じた。今回プログラムに参加したことで、体験したことを語れるので、より具体的に生徒に伝えることができる。日本で教職員間の温度差も最終的にはなくしたい。

根岸先生:

タイの教職員や児童生徒とたくさん話をしたいという思いがあったので、それを達成できたことがよかった。タイで出会ったゲンコーイ学校の Janjao 先生と帰国後もつながりを持っていることもとてもよかった。勤務校の生徒は海外に対してあまり良いイメージを持っていなかったが、自分がタイでの経験を生徒に話すことで生徒が変わっていくことが少しずつ分かってきた。生徒が将来海外に行ってみたいなど伝えてくれるようになった。教員が伝えていくことの大切さを感じている。タイは多様性に寛容な国である。タイでは多様性についてもみたいと思っていた。今後タイがどのように多様性に寛容な国になったのかを考えたい。また、日本の環境を変えられるように努力したい。

竹島先生:

帰国後はオンラインでの報告会をした。勤務校では英語の授業で今後の交流につながる活動をした。タイで通訳をした Ning さんを講師に迎え、実行委員に対してタイ語の基礎講座を実施した。今後、直接的な交流を行う中で生徒をつなげていきたい。教育現場での課題というところでは、タイ教育省でのディスカッションが非常におもしろかった。学校現場を大局的にみている点でいえば、タイも日本も差があるわけではない。また、タイも日本も、学校現場と教育現場、教員の意識の高い学校とそうでない学校の差が大きいと感じた。日本とタイとの交流を持続可能なものにするために、教育交流協定を結ぶことなどによって体制を整え、自身が異動しても交流が続くようにしたい。さらにより大きな枠組みで言うと、自身が異動した学校での交流についても検討していく必要があると考えている。

グループ②

後藤先生:

タイの子どもたちの語学レベルの高さに衝撃を受けた。日本語に興味を持っている生徒が日本語・タイ語・英語を話している様子は刺激的だった。映画とか漫画をみたところ、タイでは漫画が英語だった。ドラえもんやクレヨンしんちゃんなども英語で表記されていた。幼少期から触れる素材が英語によるものが多いので、英語が身近にあるのではないか。

中野先生：

今回タイに滞在して思ったのは、複数の言語を操れるのはシンプルにかっこいいし、世界に出たときにコミュニケーションとるのに通用するなと思った。自分はどの言語も十分でないと感じ、コミュニケーションができないといけなと思った。子どもに還元する前に、自分の能力を高めるため帰国後に英検を受けた。英語の授業以外でも英語を話す機会などを設けるなどしないと日本の教育は変わっていかないのかもしれないと思った。タイの地方でショッピングモールに行ったときに、英語での表示や案内が日本よりも多く、日本よりも英語に対する抵抗感がタイでは低いと感じた。タイ語と英語は語順が一緒で、日常的に使用する頻度は高くなくても、日本よりはタイでは英語が身近なのかなと思う。英語運用能力向上に対するモチベーションもタイの方がありそうだ。タイの子供たちは普通の授業でどれくらい英語を学んでいるのか見てくればよかった。

川田先生：

タイと日本を比べてみて、英語を話す機会が日常的に頻繁にあるかという点でもなさそうだという点で、英語を学ぶ環境というのは似ているのではないかと感じた。

[文化的多様性や異文化理解について]

グループ①

中野先生：

今回のタイ滞在は初めてでないこともあり、驚くことがそれほどなかった。しかし、タイの良い面、10年前に訪れた際と変わらない面など、前回訪問時よりもより深みのある気づきがあった。上辺だけでなく、一層タイのことを好きになれた。帰国後はタイフードロスになって、今まで海外に行った時とは違い、1年くらいタイに住みたいとも思った。相手を知る、違いを知ることは、

タイが自分にとって近い存在になると感じた。異文化理解をすすめようとしたとき校内ではハードルが高いことも感じている。異文化を経験することによって許容範囲が広がる。自分は転勤をひかえている状態で、タイへの熱をどうやって残していけるかを考えている。勤務校がある八千代市はバンコクと姉妹都市なので、地域、スポーツ(サッカー)を通じて還元することも考えている。

根岸先生：

違いを受入れる、違いを知ろうとする姿勢が大事だと思った。タイへの滞在は初めてで、自分のなかですべてを受け入れようというスタンスだったので拒絶などはなかった。異文化ではそういう態勢をつくることも大切だと思った。ただ、その態勢を育むのは難しい。例えば、海外が怖いと感じている生徒に対してどのように多様性を受入れる心を育てるかというのは考えていかなければならない。今回自分としては反省点であるが、現地に行く前にしっかり学びを深めていくことも必要だと思った。正しい知識、歴史を知ることが大事。

竹島先生：

異文化理解では経験やさまざまな人に会っていき経験を重ねることが大切だと思う。最初からパッと異文化理解ができなくてもよいと思う。できていない自分や、合わないこと、拒絶している自分をメタ認知していくことが重要だ。自分自身、海外での経験がたくさんあるので、その経験を重ねれば重ねるほど、異なるという感覚が薄れ、共通点や似ている点にも気づいていくようになる。学校現場にいると視野が狭い人がいるので、そういう環境では逆に自分が異文化人になっていると感じることもある。強引に異文化理解を押し付けるのは望ましくないが、ある程度周りへの働きかけが必要であるとも感じる。多様な人との出会いの中で議論はするし、言うべきことは言うけれど、どんな相手もリスペクトする気持ち大切にすることが重要だと思う。NPOの代表をしているので、そのチャンネルから市内の複数校をつないで実践している。単一の学校を超えて、自治体レベルでの活動も引き続きしていく予定。

グループ②

浅見先生：

タイに行くまで、タイ料理は口に合わないと思い込んでいたが、帰国してからはタイ料理屋さんを必死で探している自分がある。味覚への影響があった。タイ料理屋さんを見つけると、行ってみたいと思うようになった。これだけでもだいぶ自分の中に変化があったことがわかる。異文化体験によって自分にこれほどの変容があると思わなかった。食べず嫌いにならず、まずは食べてみようという意識の変化もあった。また、多様性の観点から言うと、タイの学校で男の子が化粧して踊っている姿が違和感なく受け入れられており、LGBTQについて日本も取り入れていくべき構えではないかと感じた。このことを勤務校の保健の授業で日本の生徒に伝えたら、タイの状況にとってもびっくりしていた。性の多様性がタイでは普通のことであることを伝えると、日本の生徒の見方も少し変容しているように見て取れた。教員としてできることは、自分で体験したことを伝えることで、子どもたちの先入観を解き放ち、海外渡航などに対するハードルを下げるということだと思う。固定概念をなくすことはできないが、やわらかくすることが教員に出来るのだと思う。

川田先生：

タイと日本の違いよりも、同じというところに着目した。タイの経済的な発展状況や教育で大切にされていることも似ているように感じた。このように感じたことを、日本の児童にどのように伝えていこうか思案している。マイペンライが流行っている。間違えることを気にしないで、と生徒たちに伝えている。英語の授業でタイ語の挨拶を取り入れたところ、児童はすぐに反応し、廊下であいさつする時などはタイ語でやりとりしている。

後藤先生：

現地で、タイ語で会話できたことがよかった。今はgoogle 翻訳などのアプリなどで、日本語からタイ語への変換はできるけれど、言語を知っているのは強みになるかもしれないと、帰国後にあらためて感じた。コミュニケーションの導入、また信頼関係の構築という点でも、言語が分かっていたほうが、違う展開になるのではないかと感じた。だからこそ、生徒にも言語はそういう点でのツールになること、また単なるツールとしてだけではなく、心の距離を近づけることもできる要素があることを伝えている。学校でもタイ語を取り入れて会話している。

最後に、全体ワークとして、今後や未来に向けて全員で共有しました。

川田先生：

一番の宝は皆さんとのつながり。これほど熱が高くて、教育を変えていこう、新しい知識をどんどん入れていこうと考えている先生方と巡り合えないので、今後も皆さんとつながりたい。また現地でのつながりを今後の交流につなげ、異文化理解のためのきっかけ作りをしていきたい。

根岸先生：

素晴らしい出会い、経験ができ、夢のような一週間だった。タイでの出会いで自分自身が豊かになっていることを実感している。帰ってからは職員会議などで発言できるようになり、自分自身が内面から変わったと感じる。また、国際理解教育の大切さ、今後の交流について考えている。帰国後はタイ語のレッスンを学校で展開したり、報告会を3年生の生徒に企画している。またタイでつながった Janjao 先生となんどもやりとりしているので、オンライン交流につなげていきたい。どんな環境に置かれた子であっても、学びの機会が失われてはいけないと思うので、今回自分自身がタイに派遣された意味を考えて、子どもたちにタイのことを伝えていきたい。自分の力で世界とつながろう、自分の力で世界を変えようと思えるような生徒を育てていきたい。学びには終わりが無い。マイペンライの精神でいきたい。

中野先生：

以前タイへの滞在経験があり、タイのことを知っていたからこそ、今回タイへの理解が深まり、好奇心を持って臨めた。異文化理解は経験や知識を積み上げていくことでより大きくなっていくものと思った。帰国後は勤務校で子どもからの反応があった。タイ滞在中に勤務校とつながってオンライン配信をしたので、その時のことをもっと知りたいという反応があり、子ども目線でタイへの関心を持ってもらえた。児童だけでなく保護者からも良い反響があった。先生がタイでの経験を子どもに話してくれることで、子どもの世界が広がり、海外がより身近になるというようなフィードバックがあった。タイ滞在の学びは自分だけのものではなく

たくさんの人に良い影響をもたらしてくれる。市にもアプローチし、自分が架け橋になっていきたい。

浅見先生：

スポーツを通して子どもたちが楽しんでいる表情は同じで、スポーツの持つ可能性を感じた。タイに対する先入観や固定概念があったが、経験することで全く変わったので、現地へ赴いて自分で経験することの大切さがわかった。海外に行ったことで、自分のいる環境は先入観や固定概念に凝り固まっている狭い世界にいることを認識し、視野が広がった。国際感覚を得た。日本の国への誇りとともに、子どもたちの固定観念や先入観を和らげることができればと考えている。生徒たちの背中を押していきたい。

後藤先生：

教員が子供たちの目を海外へ向けていくことが大事。普段は管理職の立場なので、授業する機会がないが、それをタイでできたことは貴重な経験だった。授業を通じて、タイの生徒の on と off のような心のスイッチを感じることができた。多様性や文化の理解については、専門である家庭科を通じて、衣食住の観点から伝えていきたい。今回の経験を北海道全体に発信して波及させていく。ラジオ放送などを活用していきたい。また、ソナン学校、岡山市立操南中学校と勤務校のトリプル交流も本格的に進めていく予定である。

竹島先生：

勤務校の中で、管理職に対しても真正面から向き合ってきた。教育現場での指導助言がしづらい風潮があるが、言うべきことは言うし、時にはぶつかることも厭わずやってきた。一方で必ず助けるし寄り添うことを常に伝えながら、見捨てないし見切らないことを大切に進めてきた。同僚や職員をどう育てていくか、若手の教職員が活躍する場をどのようにつくっていくのか、今まではダイレクトに直球でやってきたが、これまでの方法を変えていってもいいかなという気づきがあった。というのも、若手の先生方が純粋で情熱をもって頑張ろうとしている姿を、同じ場所、同じ時間を共有することで、直接見て知ることができた。経験年数や歳にかかわらず、良いものを持っている先生をエンパワーするのは大事だと気付かされた。参加者の一人である後藤先生が勤務校やの勤務校の先生を愛し、

思いをもって対応している姿は自分自身に大きな影響を与えた。帰国後の活動としては、勤務校で実行委員会を作り国際交流を進めている。立ち上げたことで、生徒とタイの関わりを知ることもできて、現場で発信していくことは大事だと思った。先日は、タイで通訳を務めた Ning さんを講師に迎えて、タイ語の基礎講座を開いたりしている。またソナン学校や北海道置戸高等学校とのトリプル交流も進めている。さまざまな海外研修や現地での活動にこれまで参加してきたが、今回の交流プログラムはこれまでと異なる視点を得られ、非常に有益であった。プログラムで経験したことをしっかり還元していきたい。

(伊藤 妙恵)

3. 成果と今後への活用

成果と今後への活用

微笑みの国・タイで熱く「教育」を語り、
いざ行動せむ!押忍!

岡山市立操南中学校

竹島 潤



本プログラムは「新しい時代の教育のための国際協働」と冠してある。つまり、今次現地研修により得られた気づき・知見・ネットワークが総動員され、これから子どもたちが羽ばたいていく社会をよりよくできるよう、国・言葉・文化などを越えて、「教育」という営みを通して創造していくことが求められている。

本プログラムの存在と実施そのものが「国際協働」の賜物であると考えるに、感慨深いものがある。タイ王国の3地域4学校を訪れ、教職員討議、授業参観、授業実践の機会をいただいたこと。「国の教育の背景にある」歴史や文化などへの気づきを促す、歴史文化施設や史跡などのフィールド学習を行ったこと。そして、団員相互にしっかりと情報・意見交換できたこと。いずれも、これからの教育実践、持続可能な社会づくりに参画する上で、役立つと確信する。

特に、子どもたちの学びや学校教育について、色々な共通課題を再認識できたことは、同じ時代を生きる者としての連帯意識を高めてくれた。あらためて、タイ教育省、文部科学省、ユネスコ・アジア文化センターの関係者皆様、そして日本団の熱く愉快的な仲間達に

感謝申し上げます。押忍

[今後への活用:学校において](2023年9月時点)

◆勤務校で下記の活動や成果報告を行う。

・9/11 管理職(校長・副校長・教頭)への帰国報告会

・9/11-9/15 中学3年8クラス(合計約270名)への英語特別授業「Let's know about Thailand!」

・9/11-9/15 英語科教員団への情報共有会

・9/11-9/22 教職員約70名への活動報告(職員室回覧および校内LAN掲示板)

なお、教育委員会に対しては特に何も考えていない(そもそも「職専免」扱いであり、「出張」扱いになっていない)。

[今後への活用:その他において](2023年9月時点)

◆下記の2件が確定しており、話題提供やメッセージャーとして、関係者・専門職の方とも共演を予定調整している。いずれもメディアによる広報・取材を依頼予定。

・10/22 オンライン国際講演会登壇発表(NPO 国際協力研究所・岡山主催)

・12/20 岡山 ESD カフェにてゲスト出演・登壇発表(岡山市 ESD 推進協議会主催)

[帰国後の交流](2024年1月末時点)

◆10/7(土)来日中のタイ派遣団関係者と会談@名古屋(ソナン学校 Winulas 校長先生打合せを兼ねて)

◆「タイとの交流」については、現地と繋いでのオンライン学習会/交流会を10月以降通算4回行った。

◆在福岡総領事館にご招待いただき、12/4(月)「ラーマ9世前国王陛下御生誕記念日・タイ王国ナショナルデー・父の日記念式典」に参列、様々なタイの方々・関係者と情報・意見交換させていただいた。

[タイとの交流についての具体案]

(2023年9月時点)

◆タイ:ソナン学校(本プログラム訪問校)ー操南中(竹島勤務)ー北海道置戸高(後藤先生勤務)によるトリプル国際交流プログラム。中等前期課程は操南中、後期課程は置戸高がそれぞれに行い、その気づきや学びを3校で共有し、学び合うプログラム。現在、日本

側2校の校長+担当(竹島/後藤)による会談の日程調整中。今後、ユネスコ・アジア文化センター様を通して、ソナン学校の国際交流担当者様をお繋ぎいただき、今年度中に実施したい。

◆タイ:ベンジャマ・マハラート中等学校とのEカード交換その2。昨年度取り組んだ、同校(本プログラムOBの Audy 先生ご勤務)とのオンライン交流を継続したい。本校側の生徒が中学3年となり英語力も向上させられていると期待し、より双方向の取組にしたいと考えている。

◆International Meeting Online Winter プログラム(NPO・学校連携)。これまでも地元 NPO との協力下で夏・冬に実施しているもの。さらに多くのタイの先生方が岡山の中学生(4~5校)と繋がり、英語・日本語・タイ語のよさを実感しながら交流できればと考えている。

◆操南中が交流協定を結んでいる、中国・洛陽市立東昇第二中とのオンライン国際交流授業。学年単位で総勢約 600 名規模での取組を構想中。事前準備として年末に主軸の教員が訪中予定。

(2024年1月時点)

10月~1月の日本~タイ交流実績を踏まえて、3月に日本~タイ教育交流協定を結ぶ予定です。この協定に基づき、以降、日本(岡山)とタイの友好交流を積極的に促進していきたいと考えております。

雰囲気は“上達”を加速させる

北海道置戸高等学校

後藤 幸洋



私は「雰囲気は上達を加速させる」をモットーに、自らの長所であるリーダーシップを発揮しながら教育活動を実践してきました。教育場面では、「何をするか」よりも、まずは雰囲気を作ることが大切だと考えています。

本プログラムで訪問した学校は、それぞれ雰囲気が醸成一特徴的で独特な一されており、生徒一人ひとりが屈託のない笑顔で私たちを迎え入れてくれました。その一方で、授業に入ると気持ちのスイッチが一気に切り替わり、鋭い眼差しで自らの夢や希望を追いかけているのだと見取ることができました。

また、タイの先生方の同僚性にも温かい雰囲気を感じ取ることができました。このような教育環境で過ごすことができる生徒たちの“上達”はますます加速していくことを肌で感じました。

最後になりますが、私たち訪問団の雰囲気が何よりもすばらしかったと実感しています。私たちの加速度的な“上達”が今後の教育活動の発展に必ずや生かさせることを確信しております。

[今後への活用:学校において](2023年9月時点)

◆自校生徒や教職員へは、特別授業や報告会を企画する。また、オンラインを効果的に活用し、タイの学校やタイ派遣された先生が所属する学校との交流を推進する。

また、教育委員会と連携し、講演会やセミナーを実

施する。加えて、報道機関と連携し、本プログラムの体験をコラムなどにして広く活動を周知する。

[今後への活用:その他において] (2023年9月時点)

◆過疎地域におけるこどもの存在は極めて重要である。しかし、どの地域で暮らしていてもこどもには大きな可能性がある。地域の小学校、中学校へ積極的に足を運んだり、コミュニティー活動に参加することで、本プログラムの経験を伝える機会を創出したい。小さな町からでも大きな夢に向かって羽ばたくことができることを示していきたい。

[帰国後の交流] (2024年1月末時点)

◆日時:2023年10月30日(月) 16:15~16:45 (30分間)

内容:ソナン学校及び岡山市立操南中学校とのオンライントリプル交流会を実施。互いの学校の紹介や質疑応答を通して相互理解を図るとともに、外国語を用いたコミュニケーション力を高めようとする意欲が醸成された。

◆日時:2023年12月18日(月) 19:00~19:30 (30分間)

内容:本校の生徒会とソナン学校のスクールリーダーがオンラインで交流会を実施。互いの自己紹介や学校紹介、自国や地域の紹介を通して異文化理解を図った。

◆日時:2024年1月30日(火) 15:50~16:55 (65分間)

内容:地域に関するクイズを通して、相互理解を深化させるとともに、これまでのオンライン交流の振り返りを行った。

[タイとの交流についての具体案]

(2023年9月時点)

所属校と教育委員会、その他に大別して記載する。なお、可能性については【極めて高い◎、高い○、やや低い△】と記す

◆所属校にて

- ・自校生徒に対しての特別講話の実施 ◎
- ・自校教職員に対しての研修報告会 ◎
- ・自校生徒の保護者や関係機関に対してのオンラインによる講話 ◎

・タイの学校及び派遣された教員が所属する学校とのオンラインによる生徒間交流 ◎

・タイの学校及び派遣された教員が所属する学校とのオンラインによる授業実践 ○

・タイの学校の教員や生徒の本校の視察、見学△

◆教育委員会(自治体)にて

・PTA 連合会主催による家庭教育セミナーの実施 ◎

・報道機関との連携によるコラムの執筆、掲載 ○

・教育委員会職員とのオンラインによる交流 △

◆その他

・所属学会での発表 ○

・地域コミュニティーでの体験紹介 ○

▽サポート等について(お願い) タイの学校への診察や通訳の手配について協力いただきたい

(2024年1月時点)

◆予定

前述のオンライントリプル交流会を継続実施。

◆希望①

タイの学校(特に現在交流しているソナン学校)へ訪問し、改めて日本(特に北海道)の文化に係る授業を実施する。併せて、管理職員と懇談会を実施し、学校運営や人材育成の在り方について意見交換をする。

◆希望②

前述した、ソナン学校との交流で、タイにはケアワーカーやケアマネージャーなど介護に係る職業、あるいはそれらに関する学問があまりポピュラーではないことが判明した。については、これらの学習領域を波及させ、日タイが連携してともに少子高齢社会を支え合う関係性を築けるような場を創出したい。

優しさと微笑みの体験

大阪市立加美中学校

浅見友記夫



私がタイの方々と初めてお会いして感じたことは、本当に優しい笑顔で話をしてくれる方々が多かったことである。私自身、初めてのアジア訪問であったため、とても緊張しながら日本をあとにした。約一週間うまくやっていけるだろうかという一抹の不安があったのが正直な思いであったが、入国した途端その思いは消え去った。今回のプログラムに関わってくれる人はもちろんであるが、行く先々のお店の人々、街を歩く人も笑顔で接してくれるのである。そんなタイの方々の笑顔は不安でいっぱいだった私の心に、そっと寄り添ってくれるようであった。そしてそんな優しさが何よりも嬉しく、私の滞在を本当に煌びやかで心躍るものに変えてくれた。

そして、多くの学校や文化施設を回る中でも、生徒は積極的に私に話しかけてくれたり、日本の文化授業でも素直に体験に参加してくれたりするなど、最終日になると、日本に帰るのが嫌になるぐらいの気持ちになっていた。優しい心で接してくれるタイの方々のおかげで、とても思い出に残る体験になった。

[今後への活用:学校において](2023年9月時点)

◆学校の中で、当該学年に今回のタイでのプログラムを発表する。そしてそれを公開授業として公開し、職員にも見学してもらい研究実践報告にする。

そして、感想文などを生徒に記入させ、生徒が国際的な視野を持つとともに、自らが学習している日本の環境が素晴らしいことを認識させ、日本の教育の素晴らしさ、郷土に対する思いを膨らませていきたいと考えている。

[今後への活用:その他において](2023年9月時点)

◆今回の文化授業において、柔道の国際的価値の高さを感じることができたので、多くの町道場に出向き今回の体験を話して、いま自分たちが取り組んでいる柔道という種目の素晴らしさを実感してもらうとともに誇りにってもらいたいと思っている。アメリカでバスケットボールや野球をやっているぐらいの感覚で世界は見てくれることを伝えていきたい。

[タイとの交流についての具体案]

(2023年9月時点)

まずは、学校の中で、多くの教職員にこのプログラムの素晴らしさを認識させる必要がある。その中で国際交流の一環として、生徒会とタイの現地の学校の生徒とのZOOMなどを繋ぎながら文化交流を進めていきたい。現在、学校の状況として非常に多国籍な状況になっていることから、人権学習や道徳教育の観点からも指導をしていけると思っている。

(2024年1月時点)

現地で仲良くなった生徒との意見交換を考えているとともに、将来的にはスポーツでの交流を考えている。柔道関係の先生方と現地に出向き、柔道指導などを行うことが出来ればよいと考えている。具体案としては、今回のタイで交流を深めた方々を通す形でもよいので実現させたい。

対面の交流だからこそ気付いた相違点

八千代市立大和田南小学校

中野 彩華



タイと日本の教育における共通点として、学習指導に対する教員の熱量が挙げられる。よりよい授業を展開するために日々の教材研究や授業改善を怠らずに、研究や修養に努めている。故に、教育における児童生徒の授業及び生活面における指導に対する困り感も共通する部分があった。また、外国語科及び英語科のカリキュラム開発に励んでいるのも共通点の一つと言える。小学校の授業形態をとっても、発話中心の授業で日本と共通する部分があり、交流学习を通して、文化や学校生活などの紹介もしつつ、互いの言語力を高めていくのも面白いと感じた。

一方で、タイならではのよさも多くあった。高校から専門を絞っていくという点においては、生徒が自分の将来像を明確にする必要がある。自らの進路について、履修する科目や進学する大学など選択・判断する力が求められるように感じた。高校三年生の生徒と話す限りでは、彼らの未来へのビジョンがはっきりとしていたことに加え、それに伴う学力も非常に高いものであった。

今回の派遣を経て、特に違いを知る中で、日本の教育の良さや課題を見出すことができた。小学生の段階で養うことのできる将来への力は何かを、教員自身が考え、教育活動の中に取り入れていきたい。

[今後への活用:学校において] (2023年9月時点)

◆異文化を理解し、他国の人々と交流を進めるうえで自国の文化を知っていることは不可欠であると考え。自国の文化の良さを十分に理解した上で、島国なら

では抱える課題を捉え、日本という国に対する自分の考えをもってほしいと考える。

総合的な学習の時間:単元名「再発見!ぼく・わたしの暮らす国 JAPAN」(5・6年生)

内容:教員の体験談や持ち帰った資料(本・写真など)から気付いたことや不思議に思ったことを伝え合う。調べてみたいことを決めて、タイについて詳しく調べ、日本との相違点を考える。日本とタイのそれぞれの良さを考え、日本にあったらいいなと思うことを理由や課題とともに意見としてまとめる。

[今後への活用:その他において] (2023年9月時点)

◆八千代市内に国際交流協会があり、地域の人々や国際交流に関心がある人に向けて様々なボランティアを行っている。商業施設ではイベント等を行っているため、積極的に参加し国際交流が可能な場を広げ、教育のみならず、幅広い分野で活動を行ってきたいと考える。

◆帰国後に国際交流について調べてみたところ、居住地近辺や千葉県穴井でも国際交流に関わるボランティアや日本語指導員の協力依頼など、様々な分野において必要な人材の募集があった。今回の派遣で自身の英語力にも課題を感じていたため、言語力の向上に努めつつ、人との関わりをもち続けることで、国際交流の場を広げていきたい。

[タイとの交流についての具体案] (2023年9月時点)

【総合的な学習における国際交流】

相手国の希望はないが、SDGsに関する授業実践に取り組んでみたいと考える。本校はユネスコスクールであるため、日々の学習や学校生活においてSDGsの活動に積極的に取り組んでいる。しかし、国によってSDGsで取り組むべき課題は異なる。その違いを交流しながらどのような課題解決に取り組むべきか、両国の児童同士で話し合う活動を設けていきたい。複数グループに分けて活動することで、活発なやり取りができると考えられるので、複数の端末を準備し、少人数のグループで話し合いの時間を設けたい。その際に使用する端末のアカウントや通訳者の準備等を依頼することができると嬉しい。

タイとの繋がりで見えた「未来」

群馬県立大間々高等学校

根岸 彩夏



今回のタイ派遣で過ごした6日間は、私にとってかけがえのない宝物となった。私がこのプログラムに参加した目的は、タイの人と繋がり、「教員としての在り方」を改めて考えたかったからだ。元々国際交流に関心があり、海外の教育現場を訪れて日本と比較し、各々の良さを見出したいと思っていた。そのため、学校訪問でタイの先生方や生徒さんと直接話げできたときは、「夢が1つ叶った」ということを実感し、目頭が熱くなった。

ゲンコーイ学校での文化交流授業では、生徒さんと日本文化について一緒に学んだり、テーマに沿って意見交換を行ったりした。文化交流後にある生徒が言った言葉が忘れられない。「日本の先生たちと交流できて嬉しかった。(国際プログラムがある)この学校に入ってよかった。」この言葉を聞き、国際交流が「幸せ」を生むのだと確信した。同時に、国際理解教育の重要性を再確認した。この研修で得た学びを、生徒たち、先生方、多くの人に伝えていく。そして、タイと日本の両国の発展に寄与できる人材になりたい。

[今後への活用:学校において] (2023年9月時点)

- ◆総合的な探究の時間におけるタイ派遣報告会。
- ◆「英語コミュニケーションⅡ」「英語会話」「時事英語」の授業でタイの文化や言葉を学ぶ授業。
- ◆タイ派遣通信の発行、ポスター等の掲示物での周知。

[今後への活用:その他において] (2023年9月時点)

◆みどり市と連携した国際交流事業の企画&運営
(例:報告会やイベント等の実施)

[帰国後の交流] (2024年1月末時点)

ゲンコーイ学校のジャンジャオ先生(日本語と英語の先生)と連携し、オンライン国際交流会を企画・実施した。

第1回は1月25日(木)16:20~17:10(日本時間)で実施し、本校は自ら立候補した8名の生徒がオンライン交流会に参加した。ゲンコーイ学校の生徒さん(日本語専攻)は18名参加してくれた。お互いの自己紹介や、日本のアニメ、スポーツなどの話で盛り上がった。上毛新聞、桐生タイムスに取材していただき、1月26日の記事に掲載された。

また、ジャンジャオ先生とは普段から連絡を取り、情報交換や相談などをして交流を深めている。今後も連絡を取りながら、生徒同士が交流できるような機会を作っていきたい。

[タイとの交流についての具体案]

(2023年9月時点)

タイの生徒さんとオンラインで繋ぎ、文化交流をしたり、ディスカッションをしたりする。

→授業におけるオンライン交流は、ぜひ挑戦してみたい。(本校の生徒でタイについて興味を持つ生徒がかなり増えてきたと感じているため、オンライン交流は生徒がタイを身近に感じる良いきっかけになると考える。)

(2024年1月時点)

ゲンコーイ学校との第2回オンライン国際交流は、2/13(火)16:20~17:10(日本時間)を予定している。第1回と同じメンバーで行う。第1回は、お互いに緊張し、中々話すことができずもどかしい思いをした生徒も多く見られた。

次回はブレイクアウトルームでグループを作り、より近い距離でお互いの交流を深められるよう工夫していきたい。

~質問内容~

- ・お互いの文化について
 - ・日本とタイのイメージについて
 - ・高校生活や休日の過ごし方、好きなものについて
- お互いの連絡先を交換し、生徒たちが気軽にコミュニケーションを取れるようにしたい。

研修後の私の変化

守谷市立守谷小学校

川田 雅俊



私が最も印象に残っているのは、最終日の報告会での伊藤さんの「先生たちは未来に触れられる存在だと思っている。」という言葉である。私の働き方を振り返ると、確かに「私たちは人を育てるんだ」という感覚はあったが、「未来を作っている」という考えはなかった。まだ学校に戻って一ヶ月も経っていないが、子供たちがふざわしくない行動をしている時に、どのように関わるか考えるとき、「未来を作るためにどうすべきか」という視点で考えるようになった。そうすると、不思議とイライラすることはなく、ただ子供たちと向き合えるようになった。

また、タイはかなりの勢いで経済発展しており、もはや日本と豊かさの差はほぼないように感じる。今後、日本よりも経済的に発展する国は増えてくるだろう。このように経済的な優位性がなくなっていく中で、日本は「どのような国であるべきか」すなわち、「どのような人を育てるべきか」を考えるようになった。だから、国内もしくは国外でどのようなことが起こっているかを知るために、国内の新聞のみならず、海外の新聞を読むようになったり、現在の教育制度をより知るために、私に直接関係する部分だけではなく、管理職が関わるような情報にもアンテナを張るようになった。このように、教育の面だけでなく、あらゆる角度から、未来を作るためにどうすべきかを考えるようになったことは、私の大きな変化である。

[今後への活用:学校において] (2023年9月時点)

◆訪問したタイの学校と、学校と本校の児童をオンラインでつないで、日本語で学校の紹介をし合うことで、異文化理解教育を実践したい。本校は小学校な

ので、まだ英語のレベルが低いため、その実践は難しいと考える。しかし、タイでは日本語学習をしている学校が多いので、本校の児童が日本語で学校の発表をし、タイの高校の生徒も日本語で学校の紹介をするという交流を実践したい。また、タイの文化や、交通事情などを写真で見せ、見聞きしたことを子供たちに紹介することで国際理解教育を促進したい。

[今後への活用:その他において] (2023年9月時点)

◆今後の私の実践したいこととして、「国際理解教育の推進」をしていきたい。そのために、タイのみならず、すでに訪問したラオス、これから訪問予定の中国や、ALTの出身国であるフィリピンなどと比較することで、今後日本がどのような国を目指すべきか、すなわちどのような人材を育てるべきかを検討する材料にしたい。また、本校で国際理解教育と一緒に推進していく仲間を増やしていきたい。

[帰国後の交流] (2024年1月末時点)

3学年で DEBSIRIN SCHOOL へ「守谷市のいいところをタイに伝えよう」というテーマで動画を作成し、DEBSIRIN SCHOOL へ送った。

[タイとの交流についての具体案]

(2023年9月時点)

「地域理解」及び「異文化理解」のため、交流が考えられる。言語については、本校のレベルを考えると、日本語が好ましい。また、外国語において、外国の文化を学ぶため、オンラインでタイの日本語を話す方に、講演をお願いすることができると考える。ただし、現在タイの異文化理解を促進するために講演を依頼する連絡先がないので、もしその連絡先が分かれば、教えていただきたい。すでに連絡先を交換したテプシリンスクールの先生にはメールを送ったが、返信が返ってこない。そのため、ACCUから追加の連絡を学校の代表メールなどに送信してもらるか、タイの文化などについて講演をしてもらうため、タイの教育省や訪問した学校に依頼をしていただければ、大変幸いである。

(2024年1月時点)

◆前述した動画のタイ版を作成してもらい、それを3年生の児童に見せる。

◆「目安箱 for the world」に、児童から提案された交流方法を検討し、今までのつながりを使って児童が中心となって交流方法を検討し、実現させたい。

事業担当者コメント

自分のコンフォートゾーンを飛び出し、全身で現地タイを感じた約 1 週間でした。参加者の先生 6 名は、全国多数の応募者の中から選ばれた精鋭の日本教職員です。派遣前から、真摯にそして楽しみながらタイ滞在に向けて、極めて短い日数で、共に準備を進めてきました。コロナ禍で普及したオンラインミーティングや SNS も活用しながら、日本各地にいる参加者が瞬時につながり、互いにアイデアや意見を出し合い、訪問団としての関係を築いていったのでした。

タイでは 4 つの学校、7 つの教育文化施設を訪問することができました。どの訪問先でも、日本訪問団を温かく迎え入れてくださいました。日本の 6 名の先生は、意見交換の際にも積極的に発言し、タイに対する理解を深めていこうと、それぞれの視点から質問を投げかけていました。見学や視察においても、アンテナを張りながら、貪欲に何でも学ぼうという構えでプログラムに臨んでいることが伝わってきました。また、参加者の先生 2 名は、タイの学校との交流を希望する旨を、現地での教職員交流の機会にタイの学校の校長先生に伝え、そのことが帰国後に学校間の交流に発展しました。この他にも、現地訪問を単なる訪問に終わらせずに、タイでの出会いや自分の知見を自身の教育実践に活用し、生徒の学びにつなげている活躍ぶりです。

このプログラムは、すごろくのように学んでいくようなあり方ではなく、プログラムの中での「出会い」から参加者それぞれが学び取り、自身の経験を豊かにできる「遊び」と「余白」の要素があります。プログラムの活動を通じて、学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」を自らが育み、「先生」がもつ発信力と影響力をもって、教育現場での国際理解や国際交流促進のため、ご自身の力を存分に活かし発揮できるプラットフォームです。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部 伊藤 妙恵



付録



タイ教育省表敬訪問



事前オリエンテーションの様子(日本)



現地オリエンテーションの様子(バンコク)



Debsirin School①



Debsirin School②



Debsirin School③



Debsirin School④



昼食(ナコンラーチャシーマー)



ラチャパット大学デモンストレーション学校①



ラチャパット大学デモンストレーション学校②



ラチャパット大学デモンストレーション学校③



コーラート化石博物館①



コーラート化石博物館②



コーラート化石博物館③



コーラート化石博物館④



Sung Noen School①



Sung Noen School②



Sung Noen School③



Sung Noen School④



Wat Thammachak Semaram



Khao Chan Ngam Cave①



Khao Chan Ngam Cave②



Khao Chan Ngam Cave③



Yai Thiang Cuesta



Kaeng Khoi School①



Kaeng Khoi School②



Kaeng Khoi School③



Kaeng Khoi School④



Kaeng Khoi School⑤



Kaeng Khoi School⑥



Kaeng Khoi School⑦



Kaeng Khoi School⑧



Kaeng Khoi School⑧



Kaeng Khoi School⑨



プログラム評価会 in タイ教育省



The Grand Palace and Wat Pra Kaew①



The Grand Palace and Wat Pra Kaew②



The Grand Palace and Wat Pra Kaew③



The Grand Palace and Wat Pra Kaew④



Wat Arun “Temple of Dawn”



Wat Arun “Temple of Dawn”



ขอบคุณ ค่ะ

プログラム後の教育実践



オンライン国際講演会での報告



岡山市主催「ESD×SDGs カフェ」



タイ派遣プログラム報告～掲示物の前で生徒に～



地域住民への講演



高校三年生へのタイ派遣プログラム報告



任意団体への報告



3校教育協定締結式(岡山市立操南中学校)



3校教育協定締結式(北海道置戸高等学校)

これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2018年8月26日～9月1日	バンコク、ナコンサワン、アユタヤ	5名(他、MEXT・ACCUから計2名)
2019年9月1日～9月7日	バンコク、カンチャナブリー	7名(他、MEXT・ACCUから計2名)
2021年9月13日～9月17日	オンライン	5名
2022年9月19日、20日、23日	オンライン	15名
2023年8月28日、9月2日、 9月3日～8日、10月28日	オンライン、バンコク、ナコーンラーチャ ーシーマー、サラブリー	6名(他、MEXT・ACCUから計2名)

文部科学省委託 令和 5 年度新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業
タイ政府日本教職員招へいプログラム(タイ派遣プログラム) 実施報告書

2024 年 3 月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

©2024 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)